

へぬ譯には行かなかつた。其に途中怪しむべき事が少なからずあつた。あの村には敵の騎兵の馬がまぐれ込んで居た。ある谷合を通る時には、高い岩山の上に怪しい支那人が二人まで立つて、わが軍の輜重縦列の通るのを見て居た。——だから言はぬことではない、餘り進み過ぎる、餘り危険を侵し過ぎる、果して軍司令部と知つて、敵が覗つて遣つて来たものなら、全滅を覺悟しなくつてはならない。師團の兵がいくら先に出て居たつて、急場の間都合ふものではない。

皆な出たり入つたりして居た。何うして好いか急には考も浮ばなかつた。一行の班長と言つても、軍に頼んでつれて貰つて来た唯の寫真技師だが、かれは人一倍ちよこちよこして、ゴダックを肩に懸けたり、内の中に入つて荷物をさがしたり門の外に走つて出て行つて見たりした。

「仕方がないさ、軍司令官と一緒に死ぬなら仕方がないさ——」こんなことを誰に言ふともなく言つた。

野は静かであつた。

それらしい氣勢は何處にもなかつた。門の外に出て見ると、土塚の外はやゝ斜阪になつた畠で、二尺位の高さになつた高粱が一面に續いて居る。明るい夕日が一杯にさしわたつて、十間位間を置いて、軍の援護隊の歩兵が散兵線を引いて折敷をやつてゐるのが見える。

兎に角、司令部の様子を見て来やうと言ふので、一行の一人は出て行つたが、暫くして歸つて来た顔には、一種の戦慄が歴々と見て取られた。管理部には誰も居なかつた。兵は勿論、傭員までも部員の指揮の下に出て行つた。参謀の大尉が馬に乗つて出て行かうとしてゐた。敵の騎兵が味方の

縦列を襲つたことだけは確かであるが、其後の状況は誰も知つて居るものはなかつた。『兎に角、ぐづぐづして居ては仕方がない。準備だけはして置かなくつてはならない』真面目な顔をして其男が言つた。

其時遠くに聞えた小銃の音は、更に人々の心を動揺せしむるに十分であつた。

我々は軍人ではない、遁られるだけは逃げなければならぬ。誰も皆かう考へたらしかつた。それには食ふものが肝心であつた。此處を離れて遠げて行つては、何ういふ眼に逢ふか解らなかつた。場合に由つては、山の中に三日も四日も隠れて居なければならぬやうなことに邂逅さなことも限らなかつた。

『兎に角、腹が減つて居ては仕方がない。飯を食はうぢやないか』

かう言つて、肥つた男は第一に釜の蓋を取つた。

寫真器の運搬の爲めにつれて来た二人の男はすぐそれに賛成した。

其處に居る人々は——二人は外に出て居た。班長も居なかつた。——やがて金椀に飯を山盛にして播込むやうにして食つた。晝家も柱に寄り懸りながら、さも咽喉に通らぬといふやうにして食つて居た。

残つた飯を皆な行李を出して詰めた。『食はないものには後で分けてやつても好い、兎に角かうして置くのは惜しいから』肥つた男はかう言つて、行李に詰められるだけギツシリ詰めた。

皆ないざといふ時の準備をした。荷物はとても持つて行かれない。高價な活動寫真の器械でも、二百圓出したといふ寫實機の玉でも、此處に置いて行くより外仕方がなかつた。肥つた男は黒縞子の脊負袋に行李と道明糖

二日分とをつめて、それを脊負ふばかりにした。晝家も一生懸命にその準備をした。何も彼も入つた脊負袋は、蛙を呑んだ蛇の腹のやうにふくれて居た。

一時頻りにした小銃の音もやがて聞えなくなつた。けれど不安は矢張り不安であつた。斜阪の上の散兵線の歩兵は依然として折敷のまゝであつた。夕日は野に落ちかゝつて居た。

敵襲は本當の敵襲ではなく、昨日の敗兵が逃げ後れて輻重縦列に接觸したのであつたといふことが解つたのは、もう日が暮れかゝる頃であつた。漸く安心して、外に出て行つた二人と班長とが飯を食はうとした。處が釜には飯はなかつた。

『何うしたんだ』

かう言つた脊の高い男の聲は何となく激して居た。

やがて其話が語られた。肥つた男も晝家も行李を其處に出した。しかし敵襲に激した心はまだ静まつて居なかつた。「浅ましい根性だな、誰れが先に行李に詰めたんだ」かう言つた班長の言葉には刺があつた。班長とは言へ、別に其指揮を受けるでもない人々は、平生から班長を笠に被て威張るのを不快に思つて居たので、何ぞと謂つては、よく喧嘩をしたり口論をしたりした。「貴様だつて、戦地に金を儲けに来てるんだらう」といふ腹が誰にもあつた。それに女氣のない戦地では、兎角氣が荒くなり勝であつた。始めはさう言はれても黙つて居た肥つた男も、「誰だか知らんが、始めに行李に詰めた奴は、卑怯な奴だ」と續いて言はれたのを聞いては、もう流

石に黙つては居られなかつた。

『それは僕だ、僕が諸君に勸めて詰めさせたんだ！』

かう言つた聲は矢張激して居た。

『君か、君が詰めたのか？』

『さうだ——』

『餘り慌て過ぎるねえ。君さへ食へや好いと言ふことはないだらう』

『いや、僕は僕さへ食や好いんだ。僕は自分の生命が危くなつても人のこ

とを考へてゐるやうな仁者ぢやないからなア——』

『生命が危いといふ時でもないぢやないか』

『いや、僕にはさう思はれたんだ。人のことなど考へてる暇はなかつたん

だ。』

『だからあわて者と言はれたつて仕方がない』

かう言つて班長はわざと笑つた。

『だつて君だつて、震へてたぢやないか、先刻の具合など、餘り慌て者で

もなくはなかつたぜ』班長が何か言はうとするのを遮つて、『僕はさういふ

人間が嫌ひなんだ。慌てた時は慌てたやうにすれば好いぢやないか。すん

でから自分が豪いやうな顔をしてゐる奴に限つて、勇者とか強者とか言ふ

ものはありやせんよ。君は、何もそんなことをぐづぐづ言はずに、僕等の

行李から飯を出して食つたら好いぢやないか』

『そんな飯は食ひたくない』

『食ひたくなけりや食はんでも好いさ。腹を減して居るさ』

暫し皆な黙つた。

外に出て居た一人は、『杉山君の言ひ方もちと穩當でないねえ』と言つた。

肥つた男は黙つて居た。

班長には、自分の人足につれて来た男達も矢張行李黨であるのが癪に觸つたらしかつた。『一體何と思つて居るんだ』など、此度は其方に鋒先を向けた。人足の男達も黙つては居なかつた。東京の男は、平生班長の家の近くに住んで居て、望んで伴つて貰つて来たんだが、それすら平生の不平が破裂したと言ふやうに、『何んだ、篋棒め』と言つたやうな巻舌の江戸子辯を出して、盛んに辯解したり罵倒したりした。大阪から連れて来た男も、矢張負けぬ氣で、『そないこと言つたつて』とか何とか言つた。言葉の末と言葉の末とが絡み合つて、終ひには、思はぬ處に火花が移つて行つた。

一方では江戸子辯と上方辯とが衝突した。一方では活動寫眞の撮影に對

する不平や不満が出た。班長の黄ろい聲と助手の男の太い聲とが相觸れて凄しく聞えた。

肥つた男は後には身を退いて黙つて其争ひを聞いて居た。

言ふだけのことを言つて了ふと、皆な疲れたといふやうに、黙つて了つた。嵐の後のやうに四邊がひっそりした。

『まあ、好いちやないか、そんなことは何うでも……飯を詰めたとか詰めないとか、己の飯を食つたとか食はないとか、丸で子供の喧嘩見たやうぢやないか』今まで黙つて見て居た畫家はかう言つて笑つて、『餘程おとの騒ぎの方が大騒ぎだ』

で、和解をさせる爲めに、かれは水筒から黄酒を取出した。

別
る
、
ま
で

譲は役場に居る間、お雪のことばかり考へて居た。「あんなに家に配まな
い女は、歸して了ふ方が好いと父親も言つたさうだし、母親は初めから不
賛成だつたから、何ぞと言つては、あらばかり探して、出て行くやうに、
やうにと仕向けて居る。お雪は何んなに辛らかつたらう。時々人知れず陰
に行つて泣いて居るやうなこともあつたに相違ない。われでも己を思つて
呉れ、ばこそ、今まで辛抱して居て呉れたんだ。今に父さんも母さんも可

哀相に思つて呉れるやうな時が来るだらうと思つて辛抱してたんだ。それが何うだ。今になつてあの騒ぎ……。」

譲は自分の家の厭な空気をまざまざと眼の前に浮べて見た。母親も黙つて居る。父親も黙つて居る。かれ自身も黙つて居る。かれは寧ろ今の生活を全く破壊して了はうかとまで思つた位だ。「よう御座んすとも、そんなにお氣に入らないんなら、お雪は出します。歸して了ひます。しかしその代りお父さんもお母さんも私を東京に出して下さい。私はまだ勉強しなければならぬ體ですから、……私はこんな田舎に埋れて、先祖代々の家を置いて、平凡な人間になつて了ふのは厭ですから」かれは其時さう言つたことを思ひ出した。

厭なことだ！　こんな田舎に。話相手になるやうな友達は皆な東京に出

て行つて了つて、何處を見渡しても、因循して後れた考を持つて居る奴しかありやしない。日が暮れさへすれば何處でも戸をびつしやり閉めて了ふやうな暗い田舎の町、碁と將棋と酒と縣會議員と地面の話とそれより他には何も無いこんな色彩に乏しい町になど何時までぞつとして居られるものではない——お雪が来ない前には、一日としてさういふ考を抱かないことはなかつた。かれの心は唯々都會へのみあくがれて居た。都會に行きさへすれば、どんな事でもどんな希望でも成し遂げることが出来るやうに想像して居た。

お雪だつて、可愛い可愛いお雪だつて、かれの其の心を全く其方に轉じさせて了ふやうなものではなかつた。綺麗ないちらしい影を帯びたお雪の眼でも、白い柔かい美しいお雪の肌でも、かれからその希望を全く奪ひ去

つて丁ふことは出来なかつた。

『私を東京にやつて下さる』

父母がお雪に對してやかましいことをいふ時には、譲はこれまでも既に幾度となくそれを言出した。

お雪を貰はうと言ひ出した時にも、父母は其家柄とか氣風とか周圍とかには賛成しなかつたが、嫁を貰ふ、妻を持つといふことには賛成した。嫁を貰つて、子供でも出来たら、口癖のやうに言ふ『東京に行く』も出なくなるだらうと思つた。落付いて田舎の古い家の後継者になつて呉れるだらうと思つた。

譲にしても、可愛いお雪の爲めに、自分の一生の功名を犠牲にしても構

はないと思つたことがないでもなかつた。……何も東京になど行かなくつても好い。家にはお雪がゐる。あの可愛いお雪がゐる。歸ると、黙つて入口に迎へに出て来る。顔を見合せてにつこり笑ふ。そのにつこり笑ふ心がかれには捨て難くなつかしいものであつた。

父親の勧めで、唯遊んで居てもつまらないと言ふので、やがて役場に出ることになつた。町長とも助役とも書記とも父親は懇意である。だから何事につけても便利で、その居心も決して悪くはない。『菅井さん、菅井さん』と言つて心置なく使つて呉れる。用事も馴れないものは古參のものにさせて呉れる。一日仕事もなく煙草ばかりふかして、笑ひ話などをして歸つて來ることもあつた。家に居るよりも却つて樂な位だ。——役場は町の裏の南の外れにあつた。かれは毎朝、裏道を通つて、貧しい人達の住んで居る處

を掠めて、ひろびろとした野に出て行つた。其處からは、役場の白い壁が朝日に輝いて見えた。秋も遅くなると、ユスモスの紅い白い花が其處に一杯になつて咲いて居た。

時間になつて、すぐ歸らうとすると、同僚が、「菅井さん、碁でも打つて行きませんか」などとにやにや笑ひながら言ふ。と、年老つた書記さんは、「菅井さんはとめるのは可哀相だ、奥さんが待つてる」などと言つてからかつた。

路傍に小川が流れて居た。小さい紅い白い花などが咲いて居た。秋の雲が静かに鮮かにその水鏡に映つてゐることなどもある。町の子供達が目高をすくつてゐることなどもある。秋雨が蕭々と波紋をつくつて降つてゐる時には、かれは傘を斜にして通つて行つた。「東京に出てつらい思をした

つてつまらない、それに成功するものもあれば墮落して下ふものもある。寧ろかういふ静かな田舎の方が好い』お雪に可愛がられた翌朝は、こんなことを考へながら、かれは静かに落附いた心持で其處を通つて行つた。

かれは稚い頃から筆を持つのが好きで、繪を書くことや文を作ることが上手であつた。好加減大きくなつた頃には、文章を書いて、東京の雑誌に投書してゐた。そして其の短い長い文章は過分の批評をつけられてよくその雑誌に載せられた。後には其雑誌の有望な投書家として寫眞を載せるから送つて來いなどといふ手紙が其處から來た。

一時はそれがかれの生命のやうに見えた。中學から歸ると、かれはすぐ机に向つて筆を執つた。夕飯などは食ふのも忘れて居た位である。そしてそれが少なからずかれの『東京熱』を煽つたもの、一つである。けれど今

ではもう忘れたやうになつてゐた。かれの居間にはお雪の持つて来た新しい筆筒と、雑誌や小説をギッシリ入れた本箱とが並んで置いてあつて、かれの文章の掲載されてゐる雑誌が山のやうに積んでゐる。それをお雪が毎日拂塵をかけて掃除するが、それでも埃がよくたまつた。

秋の晴れた日曜日の午後など、日當りの好い其縁側の障子を明けて、其處にござりと身を横へて厚い小説などを讀んでゐると、赤い手絡をした、銘仙の羽織を着たお雪が静かに入つて来て、「好いお天気ですね」などと言つて、縁側に立つて碧い晴れた空を見て居る。お雪はこれから三里ほど山の方に入つて行く農家に生れたのだが、家がかかり金持で、少しの間、町に來てゐたものだから、田舎の娘にしては、何處か垢ぬけがしてゐて、背の高いのと色の白いのとが常に際立つて人の眼を惹いた。それに甘えるや

うな調子で口を利いた。

それから店の方に出る處が、父母の居間で、猶ほ二つ三つ室を隔て、店になつて居る。今は商賣はさう盛にしては居ないが、それでも土地では名高い舊家になつてゐる。

譲には二十になる弟と十五になる妹とがゐた。

小舅達とお雪とは交情が好い方ではなかつた。お雪が黙つてゐる方の性質である爲めに、一層其間が面白くない。それに、弟の理一は兄とは丸で違つて、氣分が學問より商賣の方に向いてゐた。

お雪に譲が優しいのが、母親にはその機嫌を損ふ大きな理由の一つになつてゐる。餘りやさしくなれると、自分の子が嫁に取られて了ふやうな心

持がすると見える。讓はそれを知つてゐるから、つとめてさういふ素振を見せまいとするけれど、夜など二人でその居間に入ると、つい内所話をすゝるやうな調子でこそく話を始める。それが母親の耳に入ると、嫁を憎むやうな気分が一層烈しくなる。

これまでも、お雪が里に行つて十日も二十日も歸つて来ないやうなことがよくあつた。「私はとても母さんの氣に入らないから——」こんなことも言つた。讓とさし向ひで話をする時には、「あなたは私のやうなものでない、もつと母さんに氣に入るやうなお嫁さんをお持ちなさい」なども言つた。

『お前が家に居るのが厭なら、何うでもなるんだから、親達と別居することも出来るんだから——本當にお前の心持を聞かして呉れ』此間里に行つ

て来なかつた時にも、讓はわざわざ迎へに行つて、さう言つて伴れて歸つて来た。

其時、讓にはお雪の心持を疑ふやうな気分も起つて居た。生憎車がなかつたので、二人は山道を歩いて来た。丁度秋の初めであつた。お雪は讓の後に跟いて歩いた。

『僕の心は解るだらうね?』

婆さんの出してゐる休茶屋にやすんだ時、讓はかう訊いて見た。

『え』

お雪は笑はうともしなかつた。

『本當に解るだらうねえ。』

『え、わかります』

『お前がイヤなら、家に居ないたッて好いんだから。親達と別れて、分家して貰つても好いんだから——』

『でも東京に入らッしやつた方が、貴方の望が叶つて好いんでせう。』

『東京になぞ行かなくつても好いんだ。お前さへ僕と一緒に居て呉れば、どんな暮しをしても好いんだ。お前が居ない間、どんなに僕は心配してたか解りやしない』

お雪は點頭いたばかりで唯黙つて居た。

『お前達も子供でも出来ると好いんだけどもねえ』

町に居る伯母さんがある時二人に向つて笑ひながら言つた。

其時は唯笑つて挨拶して居たが、時々その言葉が讓の胸に蘇へつた。二

人の間に、子供のないといふことが、纏つて考へられるやうな日が續いた。

讓は子供を抱いて居る四邊の若い細君を見廻した。其人達は嬉々として

樂さうにして笑つて居た。子供をあやしたり、子供に乳をふくませたりし

てゐる細君達は、機嫌もよく、血色もよく、元氣もよかつた。世に苦勞な

どはなさうに思はれた。

二

お雪の母方の伯母が町に居た。それはお雪のこの町に於ける唯一の親戚であつた。ある日、お雪は無断で其處に通じて行つた。

父も母も妙なからず激して居た。『さう度々は許されない……我儘にもほどがある。お前はさういふ了簡なら、何うとも勝手にするが好い。お前も

わのお雪にそれほど心が残るのなら、もう子にはして置かれぬ」かうした語氣があつた。

譲は役場に行く前に、その伯母の家に出かけて行つた。兎に角其處でかれはお雪に逢つた。

『とても居られませんから』

かう言つたお雪の顔は蒼かつた。

譲はいろいろになだめたり賺したりした。しかしお雪は低頭いたま、黙つて居た。別居の話をしても黙つて居た。

そりを袖で眼を拭つた。

伯母が上つて來た。

それは南に向いた晴々した二階の一間であつた。其處からは田だの山だ

のが打渡して見られた。

『でも、親御がさう仰しやるんだから』

伯母がかう言つたのを譲は奪取つて、

『でも、親のお雪ぢやありませんから——僕のお雪ですから』かう言つたかれは思はず激した。

『お雪さへしつかりして居て呉れば、何うでもします。一體、親が悪いんです。それや親が賛成しなかつたには違ひないけれど、僕は僕の妻としてお雪を貰つたんです。僕は何うにでもします。勘當されても好いんです』

『さうばかりも言へませんけれど……』

『いや言へないことはない。僕は言ふ。僕は父親が勘當するなら勘當するでも好い。僕は立派に別居する』

『しかし、さう角を立てないで……圓く治まるものならば——』
伯母はかう言つてなだめたが、譲は今までに會てないほどに昂奮してゐた。

『一體、親が悪う』

かう幾度も繰返して言つた。

お雪と譲とは黙つて相對して居た。

譲はやがて、

『それでお前の丁簡は何うなんだ』かう言つて、『黙つて居ては解りやしない。お前は何うしても里に歸ると言ふのかえ。それなら、さう言つて呉れ』
お雪は軽く頭を振つた。

『しかし、本當に言つて呉れ。今度は僕も親に言ふだけのことは言はうと

思ふんだから。僕も随分こらへて居た。お前が可哀相だと思ふから、言ひ度いことも言はないでゐた。』

『私だつて辛抱したんですけれど……』

お雪は半言ひかけて聲を曇らせた。

伯母は一應里の方にも話して、一時お雪を其方に遣つて置いた方が好いと言つたが、譲はそれを承諾しなかつた。『まあ暫くこのまゝにして置いて下さい。里になど言つてやる必要はありません。伯母さんは御迷惑でも暫くお雪を此處に置いて下さい。』かう譲は頼んで行つた。

お雪はその二階に日を送つて居た。伯母の家は小商賣をして居たが、子供が居ないので静かであつた。伯母の方でも、お雪の里の方から、萬一の

時には世話になるやうにかねて頼んであるので、いろいろに不自由のないやうにお雪の世話をして遣つた。讓は役場の行きに廻り道をしては寄つて行つた。『餘りひどいことを言ふもんどちやありません。何にしても親ですから』やさしい伯母は讓の顔を見る度にかう言つた。それにも拘らず話は益々難かしい方に向いて行つた。二日目の夜、讓は遂に父親と衝突した。『勝手にしろ——』『勝手にします』さういふ處まで行つた。父親の顔にはめづらしく青筋が立つた。讓はブルブルと總身を震はした。

『貴様は勘當だ』

かう言つて父親は立つて行つた。

難かしい母親ではあるが、——人一倍お雪を邪魔にした母親ではあるが、讓が立つて出て行かうとするのを見ては、流石に黙つてそれを見て居るに

忍びなかつた。引留めていろいろとなだめ賺した。子供の時、何んなにお前の爲めに苦勞したか知れないなどと言つて聞かせた。後では不孝な兒を持つたほど辛いことはないと言つて泣いて居た。

讓は母親の言葉などは耳に入らないほど激して居た。それに若い血が總身に漲り渡つて居た。『自分が悪いんぢやない。不孝、不孝と仰しやるけれど何が不孝です。』かう言つた言葉が自分の體に反響して聞えた。母親がお雪の弱點を數へ立て、『お前は解らないけれど、お雪はそんな親切な女ぢやないよ。あの位の嫁は腐るほどある』など、言ふのを聞くと、そこにさうして立つて居られないやうな氣がして、母親の手を振放つて、帽子も冠らずに戸外に飛出した。

お雪は階下で伯母と話してゐた。讓の顔の蒼いのに何か事のあつたのは

すぐ知れた。譲は一伍一什を話す間、絶えず體を震はして居た。

『あれでも親だ！』

拳を握り詰めたやうにして言つた。

伯母は聞終つて嘆息をついた。「困つたもんだねえ」しんみりした、心から心配したやうな調子で言つた。瘦せた其顔が四邊に際立つて見えた。

外に出て居た此家の主人はやがて歸つて来た。其話は繰返して語られた。主人は考へて居たが、主婦に「それぢやお前、これから行つて様子を聞いてお出！』

『私が行つたつて仕方がない』伯母は譲の家庭の難かしいのを兼ねて知つて居るので、其處に出かけて行かうとは言はなかつた。それに、同じ町内に居ても、さう深くつき合つても居なかつた。譲とお雪との結婚が、普通

の媒妁で出来た結婚なら、もつと深い親類づき合をして居たであらうが、二人の間が先に出来て、それから話を進めて行つた結婚であるだけそれだけ、親類同士の間にも何處か圓滿に行かないやうな空気があつた。

其夜、第一に起つて来た問題は、譲が二階に泊つて行つて好いか悪いかといふことであつた。口には出さぬが、誰の胸にもそれがあつた。

『何うするの？今夜？譲さん』

二階で遅くまで二人が話して居るので、階下から伯母がかう聲を懸けた。それには譲は答へずにお雪が下に下りて来た。「泊つて行つたつて構やしない、此處を出れば、己は泊る處はないツて言ふんですがね、伯母さん？」かう言つてお雪は伯母の顔を見た。

『歸る方が好いがねえ』伯母は二階に上つて行つた。譲は其處に横になつ

て居た。

『私がかばふやうに思はれても困るねえ』

かういふ聲がやがて聞えた。

『……いゝえ、僕は明日になつたつて、家に謝りになぞ行きやしません、人を間に立て、何の彼のと厭なことです。僕等はこれから二人で世の中を渡つて行かなければならぬのです。伯母さんが何うしても泊められないと言ふのなら仕方がないですけども……泊められるなら何うか泊めて下さい。二三日緩くり考へさせて下さい。頭が痛くつて堪らない』讓は此上考へるには堪へられないといふやうにして頭を抱へた。

主人に話すと、『仕方がない、己が一寸行つて向ふの家に断つて来る。それにして、何とか言つて来さうなものだかな。讓が来てるか来てないか

位聞きに来さうなものだかな』こんなことを言ひながら出て行つた。

主人はそれから一時間ほどして歸つて来た。『駄目だよ。非常にお父さんが怒つてゐる。……何うかかまはずに置いて呉れつて言ふんだが、仕方がない。これだけ言つて置けば、此方の義理が立つから』

『随分酷い親達ですねえ』

『矢張、始めが出来合で、お雪が讓さんを騙して居ると、てんから思つて居るのだから駄目だ』

『困つたものねえ。』

二階の二人は其夜は遅くまで眼を覺して居た。話聲が細々といつまでも聞えて居た。主婦があとをすつかり片附けて床に入つてもまだ聞えて居た。

譲は目が冴えて眠られなかつた。
東京に行けたら、二人で一緒に行かう。かういふ話をした時には、お雪の眼も光を帯びて来た。『さうすれば、貴方の望も遂げられますねえ』かう言つて喜んだ。

しかしそれが出来ることか出来ないことか？それがすぐ二人を暗い前途につれて行つた。広い世界、自由な世界、それを譲はかねてから望んで居た。その意味の十分に解らない時分から『自由であれ』などといふ短文を書いた。けれど自由を得て、赤裸々な人生に向つて、今更に寂しさと心細さと便りなさとを感じない譯には行かなかつた。

その心細さは細い網で深谷を渡つて行かなければならないやうな心細さであつた。その寂しさは人の居ない廣々とした野原を歩いて行くやうな寂

しさであつた。それに、譲の心にはお雪に對する多少の不安と疑惑とがあつた。此方から心をすつかり開いてゐるだけそれだけ、お雪の心は自分から離れて行きつゝ、あるのではないかといふやうな疑惑を持つてゐた。黙つてゐて、ずんずん實行して行く女の性質も、かれに頼りないやうな心を抱かせるに十分であつた。男の手を握つたのも女だつた。黙つて里に逃げて歸つたのも女だつた。今回の事も女が自分で決心して實行した。これから先何をするか解らないといふやうな不安が微かながらも起つて来た。

『もう少し本當のしつかりした處をさかして呉れ』譲は幾度となくかうお雪に言つた。

けれどお雪は決してはつきりしたことを言はなかつた。言はれる度に唯點頭いで見せるばかりである。

夫婦が——其の成立は兎に角、結婚して盃を取換した夫婦が、かうして自分の家を出て、他人の二階に寝て居るといふことが、譲には不思議に思はれた。空想が果てしもなく續いて行つた。

幾度か寝反りを打つたり、嘆息をついたりした。

お雪はスヤ〜と寐て居た。

三

中に入つて呉れた人達もあつたが、ぢき手をひいて了つた。三日目には、家から譲とお雪との身のまはりのものを荷車に載せて届けて来た。

お雪の里の方にもやがて其話が知れた。お雪の兄が心配して出て来て、形式だけでも媒妁に立つた人に頼んで先方へ行つて話しをして貰ふことに

した。其時兄も一緒に行つて、頭を下げて、お雪の爲めに、重々その我儘であつたことを謝した。しかし譲の父母は容易に解けなかつた。成行にまかせるより他に仕方がない。わざわざ出て来た兄はその翌日から言つて山の方に歸つて行つた。

譲の父母にしても、その親類の人達にしても、矢張自然に任かせて置くより他仕方がないと思つた。『あの譲の氣遣ひは無理をすると、何んなことをするか解りやしない、あの女にすつかり騙されて居るんだから、それが覺めるのを待つより他に仕方がない……なアに、ぢき覺めるよ』などと譲の伯父に當る人は父親に言つた。

譲はそれでも毎日役場に出掛けて行つた。役場の人達はぢきその話を耳にしたが、しかし誰も面と向つてそれを聞き糺さうともしなかつた。いつ

でもと同じやうな仕事をして、同じやうな談話をして、そしてかれは歸つて行つた。

譲は役場に於ける自分の地位——僅か月給が十二圓ではあるが、今では自分達の生活する唯一の財源である役場の地位、それを父親は激怒の餘り罷免させるやうな手段を取りはしないかと心配した。しかしそれは單なる杞憂に過ぎないといふことが段々知れて來た。家では、父親も母親も父とめてそれを世間から隠さうとしてゐるといふ話を耳にした。

それでも一度譲は町長の家から呼ばれたことがある。果して問題が起つたと見える。かう思つてかれは其家を訪問した。しかしそれは案外であつた。町長は自分一己の了簡で、譲からその話を聞かうとしたに止まつて居た。『はア、さうですか……しかしお父様を怒らせても仕方がない、それに

これから細君と一緒に居やうと思ふなら、猶更父母の機嫌を取つて置かなければならない。親を粗末にしては此方に道理があつたつて何だつて駄目ですからね……私も機会を見て、お父さんにお詫をして上げるやうにしますから、君もそのつもりで居なくつてはいけません』かうした和らかな物の解つた意見をされて、譲は歸つて來た。

二階では夫婦と言ふよりは戀人同志と言つたやうな生活が續いた。

伯母さんに世話をかけるのは氣の毒だと言ふので、土鍋やら七輪やら茶道具やらを買つて來た。『それぢや御飯だけ一緒に交ぜさせて下さい。土鍋のお飯はおいしくないから』お雪はこんなことを言つて伯母に頼んだ。

『私も勝手元をしますから』かうお雪は伯母に言つた。けれどお雪の起る

る時分には、いつももう朝日が窓に當つて、下では伯母があと仕舞の釜を洗つて居た。

瀬戸の丸い火鉢を室の片隅に置いて、そこに伯母から借りた鐵瓶をかけて置いた。水さしは大きな土瓶で間に合せて居る。其二階には三尺の半押入しかないので、蒲團は半ば室の隅に積まれてあつた。

小さな机の上には、新聞や雑誌が一杯に散らばつて、硯箱は蓋をしたまま、幾日にもつかつたことはなかつた。午後の日影は、裁縫箱だの、紅の片だの、新聞だの、物尺だの、一面に散らばつた一間を明るく照した。

讓は歸りに牛肉などを買つて來た。「おい、今日は御馳走がある」などと、言つて、風呂敷の中から竹の皮包を出したりした。讓が七輪の火を煽ぐと、お雪は駆出して行つて自分で葱を買つて來てそれを俎板で細かく切つた。

小さい茶湯臺の上に置いた目ざるの中には、焼豆腐だの、絲こんだの、馬鈴薯だのがぞたぞた入つてゐて、鍋から颯々湯氣は薄暗くなる空氣の中にぱつと白く立つて居た。樂しさうな讓の顔が其中に見えた。

ある夕暮、お雪は下りて來て

『をばさん、徳利がありますか？』

『何うするの？、徳利なんか』

『お酒を少し買つて來いつて言ひますから』

『酒を飲むの？』

此處では酒を飲むものはなかつた。主人は酒の匂ひを嗅いだだけでも酔ふといふ方の人であつた。伯母は酒粕も食はなかつた。

『家には徳利なんかあるか何うだか』伯母はかう言ひながら、戸棚の奥を彼方此方とさがして、漸く埃に埋れた燗徳利を一本取出した。『これはいつか兄が燗徳利に盃位なくつちやつて置いて行つただけけれど……使つたことなんかありやしない』かう言ひながら流し元に行つて、それを洗つて、お雪にわたした。お雪は近い酒屋に酒を買ひに行つた。時には友達などが訪ねて来ることもあつた。『菅井があの戀女房と別居してるさうだ』などと言つて遣つて来た。一緒に雑誌に投書してゐた友達が来た時には、話がいつもはずんだ。お雪が傍で見ても面白さうであつた。

大福などを袂から出すものなどもあつた。ある友達は、親と子との關係を盛に議論して行つた。『本當だとも、親の嫁ぢやない、子の妻だ。今の親

達は干渉ばかりして仕方がない。』こんなことをも言つた。

此處に来る友達の中で、お雪のことをかなり詳しく知つて居るものもあつた。それはこの町の在に住んで居る小學校の教師であつた。お雪も其男を知つて居た。『まア香取さんですね、御久振ですこと！』などと言つた。

其男は其時一緒に来た友達に、『お雪さんといふ女ね、あれは不思議な女だよ。菅井の處に来る前に戀人があつてね、大分深い交情だつて言ふ話を聞いたことがあるんだ。よくあつして一緒に居るね』

『さうかね、そんなことがあるのかね』それを聞いた友達はかう言つて、『それで、今その男は何うしてるんだ』

『矢張、在の小學校の先生をしてゐるかね。今でも手紙位往復してゐるんぢやないかと思ふんだけれど……』

『そんなことはないだらう』

『いや、何とも解らんよ。あの女はあゝ見えてあれで中々評判だつたんだからねえ。容色が好い女は、何うしたツて、さういふことになるー』

『さうかなア』

考へるやうにして其友達と言つた。

ある友達はまだ次のやうなことを話し合つた。

『菅井は納りかへつてゐるぢやないか』

『あれで長く續くかね』

『怪しいものだよ。家でも手古摺つてゐるらしいよ』

『さうだらうねえ、お雪さんは綺麗だけど……菅井が惚れてゐるほど、お雪さんは菅井に惚れて居ないんだらう』

『それはさうだ。僕等が行つて見てもわかる』

讓の周囲の人達は、二人についていろいろな噂をした。二人の生活は人に好奇の情を起させるに十分であつた。

讓は時々眞面目に考へ込むやうになつた。二階の一間にも晴れた日ばかりつゞいては居なかつた。雨が降つたり、風が吹いたりした。障子がびつしやり閉め切つてゐる時もあつた。

伯母とお雪の里と、それが讓の心にある暗い影を投げて行つた。さうした考は以前にも起らぬことはなかつたけれど、此間ふと伯母とお雪と何か頻りに話して居るところに歸つて来た時ほど鮮かに其の暗い影を意識したことはなかつた。『何を話して居たんだえ？』別に何も……『簡単な會話

で其時は濟んで了つたけれど、それから讓は注意してお雪の舉動を見るやうになつた。

お雪の籍はまだ入つて居なかつた。それも讓に不安な心を起させた。お雪の里から籍のことを度々父母に言つて來た。父母は其度毎に何の彼のと云つて成たけそれを延すやうにしてゐた。父母には其頃からお雪を本當に家に入れる積りはなかつたのだといふことが今になつて始めて分明と解つて來た。それと共に、籍のまだ入つて居ないお雪と自分との關係が甚だ覺束ないやうに思はれ出して來た。

其時、お雪と伯母とは確かに籍のことを話して居た。「まだ籍も入つて居ないんだからねえ」かう言つて、それから伯母が何か言ひ出さうとする處に讓は其姿を顯はしたのである。と、二人は言ひ合せたやうに狼狽して、話

をやめて了つた……

尠くともそれから二日ほど讓は黙つてお雪のするさまを見て居た。お雪は常よりも一層沈黙の淵に墜ちて居た。點頭さもしなければ笑ひもしない。讓の命ずることは黙つてした。夜は脊中を其方に向けて、話相手にならうともしなかつた。

其二日間は雨がびしよびしよと降つた。灰色の雲が隙間もなく空を蔽ひ包んだ。かれはそれでも傘をさして役場に出かけた。と、ゆくりなく途中で角を此方に曲つて來る妹に邂逅した。妹は知らぬ風をして、其儘すれ違つて行つた。「妹！現在肉を分けた妹にも見放された！」かう思つてかれは下唇を噛んだ。

暴風のやうな心持に惱まされて居た。これほど思ふ心の萬分の一も知ら

ないで、スヤスヤと寐て居る女が憎い。「貴様の爲めには親をも捨てた。兄弟をも捨てた。財産も名譽も捨てた。それも知らないで、里に歸ることなどを考へて居やがる。」かう思つてかれは夜中に跳ね起きて床の上に坐つてゐた。

「此間、お前は籍のことで何か伯母さんと話して居たらう」

三日目の朝、堪らなくなつて、譲はかう言出した。

かれはぢつとお雪の顔を見た。

『い、え』

お雪の顔は赤くなつた。

『虚言を言はないで、話して呉れ』

『い、え、そんな話しはしません』

『本當にしないのかえ』

『……』

『したつて好いよ。したつて悪いッて言ひやしないよ。しかし、僕の心も少しは考へて呉れるだらう？』

お雪は黙つて了つた。

『それぢや己は伯母さんと呼んで来る。こんな生活——こんな虚偽な生活に甘んじては居られない』かう言つて、譲はトントシ音を立て、階を下りて行つた。

伯母さんはやがて伴れられて來た。『さういふ評ぢやないんだよ』伯母さんは困つたやうな風で静かな調子で話し出した。

「實は讓さんにも話さうと思つて居ただけけれど……まだ話すほどのことでもないと思つて黙つて居たんですよ。此間、兄の方から手紙が来て、籍もまだ行つて居ないのであるし、お互に若い身の上ではあるし、お雪の爲めに親御との間を割くといふのも具合がわるいから、二人が承知なら、無いものとあきらめて歸して貰ふやうにしたいと言つて来たんだが……」

「籍、籍ッて言ひますけど、お雪は正當な私の妻です！」

讓の聲は高かつた。

「さうですとも——さうの位ありはしない。だから讓さんに話さないで何うの彼うのと言ふのではないんだよ。鳥渡其の話をしたばかりですよ」

「それでお雪は何うなんです。そんな話を黙つて聞いてゐたんですか？」

「黙つて聞いて居るも居ないもないんですよ。唯、さういふ話をしたばかりですよ」

「りですよ」

話はそれぎりでおしまひになつた。

四

讓は絶えず苛々して居た。此頃では血色もよくなかつた。お雪の心は常に疑惑の恐ろしい種をかれの胸に蒔いた。お雪と別れる！それを考へると心臓の鼓動が高くなるほど、かれの心は女の方に偏つて居た。お雪を離しての生活をかれは考へて見ることが出来なかつた。時には「何うか、さういふ考を起すのだけはよして呉れ、お前の爲めには何んなことでもするから。お前の前に手を突いて謝ることも何でもするから」といふやうな消極的な氣分にもなつて居た。

自分の心、自分の言葉、自分の態度が女の心持に合はないのが、自分にも腹立しいほど情けなかつた。で、かれはお雪の機嫌を取るやうな言葉のつかひ方をしたり、態度をしたりした。わざと笑つても見せた。戯談をも言つて見せた。

それに譲に取つては、親まで捨て、揚句にお雪に捨てられるやうなことがあつては、それこそ男としての一分が立たないといふ腹もあつた。——二階には同じやうに日が照つたり、雨が降つたりした。畑に咲いてゐるコスモスの花が夕日に榮えて繪のやうに見えた。

勉めて其心を静かにしやう、つとめて平氣で居やう。かう思ふこともわる。まだ起りもしないことに取越苦勞をしたつて仕方がない。かうも思ふ。それに、お雪の身になつても心細いに相違ない。家に居る時と今とは身分

が違ふ、生活が違ふ。これから何うかして生活の方法を立てなければならぬ身だ。少しは女の心も察してやらなければならぬ。かうも思ふ。けれどさうした考はいつも自分の苦しいつらい情けないのに引寄せられて了ふ。で、ついイライラする。黙つて蒼い顔をしてゐる。神経の昂奮したやうな態度を伯母だのお雪だのについ見せて了ふことになる。……何うかすると、お雪が眼を赤く泣腫してゐることがある。いつもなら心配して何の彼のと慰めてやるのだが、その事があつてからは、虚偽の涙！不安の涙！不平の涙！すぐかういふ風に取つて了ふ。何が悲しくつて泣いてゐるんだ！何が辛くつてそんなに眼を赤くしてゐるんだ！男の心も知らないで——すぐかういふ風に自分の身に引寄せて考へる。そんなに悲しいなら、何うでもしろ』こんな風に捨鉢にも考へる。

時には何も彼も捨て、新規時直しとしやうかとも思ふ。お雪に逢はなかつた前、お雪を妻にしなかつた前、その生活は何んなに生々として居つたらう？何んなに活気に富んで居つたらう？其頃には、かうして田舎になどぐづぐづして居る氣はなかつた。東京！東京！とばかり心が動いて居た。何うにかして機会を探し出して都會に出やうとばかり思つて居た。かれは棚の上に塵埃に埋れてゐる書籍を思出した。自分の文章に加へられた希望に富んだ批評を思ひ出した。花々しい一小成功者！かれは其頃その得意な姿を夢に見た。それから比べると、今の状態は？今の離れやうは？毎日てくてく役場に通つて行つて、戸籍の臺帳やら筆記の寫し物やらに解雇してくだらぬ話に笑ひ興じて、歸つて来ては女の動搖した心に頭腦を勞らしてゐる。これが二年前の菅井讓と同じ人間か。いつぞ破境して丁はう。新し

い自分の生活を打建てやう。』かう思つて断乎とした決心をして見る。しかしそれがいつでも一時間と續いて居ることはなかつた。お雪——その可愛いお雪に別れる！かう考へると、それが忽ち鈍つて了つた。

女の機嫌を取るにも取られない、自分で決心することも出来ない、意味のない不愉快な今の生活を辿つて行くより他仕方がないといふやうな日が続いた。前途に起つて来るのは雨か風かそれとも晴か、それはかれ自身にも解らないが、しかしいづれは何等かの現象を呈するには相違ないやうにかれには思はれた。

かれは不愉快な神経性な顔をして日毎に役場への路を歩いて行つた。

ある夕暮、お雪が竊かに手紙を隠したのを讓は見た。確かに見た。

「何處から来た手紙だ？」

「……………」

「お見せ」

お雪は黙つて階下に下りやうとした。

「お見せツたら、見せないか」

かう言つて、譲は後からお雪の胸を抱いて、帯の處に手を遣つた。其處に手紙をかくしたのを譲は見たのである。お雪はそれを取られては大變と言つたやうに、一生懸命になつて男の手を擽へた。取らう、取られまいとする争闘が暫し続いた。

「われ——」

と言ふお雪の聲が聞えたと思ふと、長い手紙が男の手にあつた。女は白

い手を延してそれを取らうとした。そこにまた暫し争闘が続いた。女は一生懸命になつて男の手に武者ぶりついた。長い手紙は三つにも四つにも扯き裂かれた。男はその一片を確實に握つた。

三階の争ひの音を聞きつけて、伯母さんが上つて来た時には、お雪は打伏になつて歎息して居た。男は薄暮の光の中に立つたまゝ、セイセイ呼吸を繰り返してゐた。

「また夫婦喧嘩かえ」

かう言つた伯母さんは、先づお雪の傍に行つて、其様子を聞かうとした。

「伯母さん、投つて置いて下さい……………わんまりだから」

お雪は猶歎息した。

「何方がわんまりだ、馬鹿！」

譲も激して居た。

長い間こらへて居た悲哀が一時に胸にこみ上げて来たと言ふやうに、ヒイヒイいふ女の泣聲が暫し四邊に聞えてゐた。

伯母も呆れて立つて居た。

譲は立つたまゝ、暫しお雪の方を見て居たが、「馬鹿！」ともう一度言つて、そして机の前に坐つた。

女の泣聲は猶續いて居たが、やがてそれが段々秋寂になつて行つた。

『お前さん方、まア、何うしたツて言ふんだえ？』

伯母さんはかう言つたが、何うすることも出来なかつた。

男の握つた一片は、その長い手紙の丁度中頃とも思はれるもので、次の

やうに書いてあつた。男の手跡だつた。

……貴女の不幸福は貴女の心より起りしことにて、今更、何とも申上ぐることに出来ず候、御同情申上候より他に言葉は無御座候、しかし今更いゝろににお考へなされ候うても詮なく、夫を大切になさるより他無仕方と存候、困難は人生の常に有之、小生などのこと御考へ下され候は、思ひ半ばに過ぎ候ふことに存候。

小生は田舎のさびしき處にて子供を相手にさびしき日を送り居候、最早當年の希望も水の泡と相成り、かうにしかならぬ身とあきらめ居候——これも貴嬢の爲めと存候、一時は身も世もなさやうに思ひ候ひしも今にては大分落附き申候、御訪ねくだ……
これできれて居た。丁寧な文句で書いてあつた。中途で切れて居るので

あとはどんなことが書いてあるか解ないが、別にこれと言つて大したこともでもないやうにも思はれた。お訪くた……其處を譲はいろいろに考へた。日が暮れて了つた中に、机の前に坐つて頬に兩手を當てた譲の姿がいつまでも黒く見えて居た。

お雪の眼は翌日まで赤くなつて居た。

二人は何も言はなかつた。譲は何方かと言へば機嫌を取るやうな様子を見せた居た。お雪は黙つて朝飯の支度に取りかゝつた。朝飯も二人は黙つて食つた。

その頃お雪は體が汚れて居た。汚れてゐると言つた。夜も二人は床を別に敷いて寝た。

お雪を伴れて東京に行かう。譲はかう決心した。

自分の家の父母、お雪の里、お雪の伯母、此間のやうな手紙を寄越すお雪の昔の友達——さういふものからお雪を自由にしなければ、かれは落附いて生きて居られなかつた。お雪にしてもさうだ。誘惑の多い女の身にしては、一層かういふ境遇に居るのが、心を迷はせる種となるらしい。東京に行つての生活の辛いのはかれは知つてゐる。運が悪いと路頭に迷はなければならぬ。しかしそれよりも今の生活が一層悪い。

譲は東京に行くだけの準備をしやうと決心した。一月暮す金さへあれば好い。から思つた。實行に取懸らうとすると、いろいろな不安やら疑惑やらが起つて常にそれを躊躇させた。一日二日はかうしてまた經つて行つた。

かれは遂に決心した。かれが一番先に行つたのは、つい一里ほど離れた伯父の家であつた。百姓をする伯父の家では、收穫に忙がしい頃であつた。伯父も家族の人達も一緒になつて働らいて居た。「よく来た。よく来た」かう言つた伯父は肩から上つて来た。二人のことなども心配して聞いて呉れた。やさしい伯父は、讓の話出したことを「好い思ひ立ち」だと言つて、「それは爺に話して見る方が好い。お前が話せないなら、己が話してやる」かう言つて呉れた。忙しい中で餓餓など打つて御馳走して呉れた。

歸途は月の明るい夜であつた。近い山と山との間には、小さな谷川が流れてゐた。月はそれにキラキラと美しく碎けた。野にはまだ働いて居る人達もあつた。讓は久し振で昔の若々しい心にかへつたやうな人であつた。東京、そこにかれはお雪を置いて考へながら歩いた。何んな艱難とでも戦

はう。何んな飢餓とでも戦はう。かう思つたかれの脈には、生々とした力強い血が流れた。お雪さへ居たら——お雪の莞爾した顔さへあつたら何んなことでも出来る。かれの前には新しい人生が開けたやうな気がした。かれは谷川に架つて居る橋を此方から向ふに渡つた。肌にしみ透るやうな鮮かな水の音が聞えた。静かな静かな自然！思はず橋の上に立留つたかれの眼からは涙が流れた。

五

家に歸つて見ると、お雪が居ない。

机の上には、置手紙がしてある。それにはかう書いてある。

——いろいろお世話になりました。私は考へに考へた上、御暇を戴く方

が、貴方のお爲めだと存じまして、今日永のお別れを致します。實はお話をしてからと存じましたけれど、とても御ゆるしがないと思つて黙つて家出します。伯母さんにも話してありません。また里にも歸りません。何うか私の跡をさがさずに置いて下さい。私が居なければ、自然お父さんの勘當も許りること、存じます——好い奥さんを持つて幸福に暮して下さいまし。

雪より

ゆづる様

かれは思はず跳り上つた。眼に映つた文字を疑つて今一度見返した。矢張お雪の字である。かれは天と地とが倒さになつたやうな気がした。「馬鹿な奴だ！」と叫んで下唇を噛んだ。

猛然として起つて來たのは、伯母のさし金だといふことである。伯母に話してない。嘘だ。嘘だ。そんな筈がない。かう思つたかれはすぐ階下へ下りて行つた。

『伯母さん、お雪が家出した』

『え——』

伯母は驚いた顔をした。

『伯母さん、何處に遣つたんです、後生ですから教へて下さい。歸るんなら、歸るんで好う御座んす。縁も切ります。けれどこんなことは出来ない。こんなことをしては別れられない。伯母さん後生ですからお雪の居る處を教へて下さい』

『さア、氣を落附けなさいよ、護さん』伯母はかう言つて置いて、『本當に

あの子は何處かに行つたのかしら、鳥渡、お友達の處まで行くツて言つて出て行つたんだがねえ。」

「伯母さん、そんなことを言はずに教へて下さい。後生ですから教へて下さい。」

「だつて、私、ちつとも知らないんだもの……まア本當に、あの子は出て行つたのかしら……。讓さん、何うしてそれが解つたんだえ？」

讓は手紙を見せて、

「此處にはかう書いてあるけれど、伯母さんは知らない筈はない。そんな筈はない。何うか教へて下さい。」

「まア、それぢや本當に出て行つたのかねえ。さつき三時頃、伯母さん鳥渡お友達の處に行つて来るツて、あの銘仙の衣服を着て出かけて行つたから、私はそんなこと、はちつとも知らずには、遅いことだ。何うしたんだらう。久し振でお友達に逢つて、話をもて、遅いのだらうとばかり思つて居たのにねえ。呆れた子だねえ、まア」

本當に知らない伯母は、かう言ふより他に仕方がなかつた。
「本當ですかえ？ 伯母さん。本當に知らないんですかえ。伯母さん？」かう言つたが、讓は痛恨に堪へざるもの、やうに、「僕の心持が解らんのかなア。これほど思つてゐる僕の心持が解らんのかなア。馬鹿、馬鹿、馬鹿な女だ」

「まア、讓さん、そんなに言つたツて、出来たことは仕方がない、今少し落附いて話をなさいよ——」

伯母はかう言つて、倒れやうとする讓の體を支へた。

『己のこの心が解らんかなア』もう一度繰返して言つて、『伯母さん、その友達の家ッて言ふのは何處です?』

『それは石町の八百屋の角を奥に入つたしもた屋の娘——其處に行つたんだとばかり思つてゐたんだがねえ、私は——』

『本當に何とも言置いて行かなかつたんですか』

『本當ともねえ、虚言を言つたつて仕方がないぢやないかね』

譲は黙つて考へて居たが、『謙だ、謙だ、伯母さん達が寄つてたかつて、かういふことにして了つたんだ! 僕が親から離れたもんだから、役場の安官員になつて了つたものだから……』かう言つて、手紙をビリビリと引裂いて、戸外に出て行つた。

その石町の八百屋の角では、月が好いので、町の若い衆たちが、娘子供

と何か言つて騒いでゐた。八百屋の肆には、マントルをつけた瓦斯が青く美しく柿だのバナ、だの野菜物などを照してゐた。子供達は『かげやどうろくじ』を遣つて遊んでゐた。しもた屋の格子戸の中には、ランプが明るく障子に映つてゐた。笑声も聞えた。あんな手紙を置いて行つて、わざと自分を調戲つて見る積ではなかつたか。お雪は譲の此處に来るのを待設けてゐるのではなかつたか。かう思つて、譲は暫し其處に立留つて、家内の話聲に耳を敬てた。笑声がまた聞えた。お雪の笑声もそれに交つて居るやうにも思はれた。かれはガラガラと格子戸を明けて案内を乞うた。

『菅井ですが。もしやお雪は參つてはをりはしますまいか』

ランプを持つて出て来た中年増の女は、譲の顔を見て、鳥渡會釋をしたが、奥の方を見てから、『先程入らつしやいましてたけれども、ちきにお歸り

になりまして御座いますが——』

『参るには参つたんですか』

『え、鳥渡お見えになりました』

『何時頃でした？』

『さうで御座ますね』また奥の方を見て、『四時頃で御座いました。娘と鳥渡話してお歸りになりました。——何うかなさいましたんですか？』

『え——少し用事が——ではまた』

譲はソ、クサと戸外へ出て了つた。顔を見られるのが辛いのであつた。二歩三歩歩いて、『娘に會つて聞いて見やうかしらん』かう考へたが、『何うせ駄目だ！』と頭を振つて、通の方へとすたすたと歩いて行つた。

今一軒——お雪の乳母の家がある。それは場末の大工の上さんになつて

居た。お雪と一緒に一度行つて見たことがある。無論今日は町の中に居るに相違ない。三里もある里——其處には俣も通はない——其處に歸る譯がない。さうだ、無論町の中に居る。探し出さないでは置かない。かう思ふと元氣が出た。

その大工の家に曲る横町の處に来ると、かれの胸はまた早鐘をつくやうに騒ぎ出した。かれはお雪が其處に居て、兎に角かれに逢つて呉れるのを望んだ。結果は何うなつても構はない、兎に角其處に居て逢つて呉れさへすれば好い。大工の家では戸がもうピンシャリ閉つて、二階も全く暗くなつてゐた。隙間を洩れて来る灯も見えず、唯月が屋根の黒い影を地上に映し出してゐるばかりである。

遠くでは犬が吠えた。

『お免なつら』

それを少くとも五六遍繰返した。漸く奥で返事がした。

戸を明ける前に、『何方ですか』

『菅井ですが』

やがて前の戸を細目に明けたのは、その乳母である。

『お雪はこちらに参つてゐないでせうか』

『え、参つて居りません』

『晝間出たつ切り戻つて来ないんですがな——』

『参つて居りませんがな——それはまア、何うしたつて言ふことでせう。

ひよつとかすると、お里の方にも——』かう言つて、でも、黙つてお出

やるといふことは——何うしたこんでせう』

譲は困つた顔をして立つて居た。

『まア、こちらにお入んなされや』

かういふ乳母の言葉の跡について、

『本當に来て居ないんでせうか。もし来てゐるなら、鳥渡でも好いから逢はせて呉れる譯には行かんでせうか。』

『それやもう参つて居さへすりや——』

居るやうにも思はれ、ば、居ないやうにも思はれた。で、譲は暫く其處に立つて居た。

『もう、歸つて居さつしやるかも知れねえ』

乳母はこんなことをも言つた。

いつまで其處に立つて居ても仕方がなかつた。で、譲は『ねた處を起し

てお氣の毒でした。來たら教へて下さい』から頼んで置いて其處を離れた。

月の明るい夜更の町をかれは酔漢のやうにして歩いた。何處に行つた？ 他に行く處がない。あの手紙を寄した男の處？ かう思ふと、全身に燃えるやうな血が流れた。『探し出さないで置くものか』かれは拳を握つてかう叫んだ。

ふとまた思附いた。『乳母の家に居るんだ！ 確かに居るに相違ない。男の處に行つたとは思はれない。そんな深い交情だとはあの手紙では思はれない。あの乳母め、確かにお雪をかくしてゐる！ それに違ひない』かう思つてまた二三間取つて返した。『駄目だ！ 駄目だ！ 行つたつて駄目だ！』再び立留つたかれは聲を擧げて泣きたいほどであつた。

お雪と別れる？ そんなことが出来るか。かれは遂に、掌を顔に當て、泣き出した。

かれは何う町の通を歩いたか自分でも分らなかつた。其處等には灯が見えたり、人が通つたりした。月は依然として通の家並の屋根を黒く地上に落して居た。ふと三味線の音が耳に入つたので氣が附くと、其處を折れ曲つた細い通に軒燈が賑かに點いて居るのが見えた。灯の明るくかゝやいた二階には女の騒ぐ聲も聞えた。『こゝは新町だ。己は何處を何う歩いてこんな處に來たんだ』かれはかう言つて、其處から引返した。

『よし、明日、里に歸る途中でつかまへて呉れる』

かれが歸つて來て時には、もう夜が十二時を過ぎて居た。

あんな置手紙をしたが、思ひかへして歸つて來たから、何うか堪忍して

下さい。かう言つて歸つて居やしまいか。かうした願ひも儂ないわだなる願ひであつた。主人夫婦は心配さうなしかし眠むさうな顔をして火鉢に對して坐つて居た。

伯母さんは何か二言三言言葉をかけた。しかしかれにはそれが何を言つたのだから耳に入らなかつた。

伯母はかれの跡からランプを持つて二階に上つて來た。「分りませんか、困つた子だねえ。何とか一言位相談して呉れても好いのだのに……」かう言ひながら、讓の蒼い顔が無氣味さうに見た。

讓の眼の前には、二十日間お雪と一緒に暮した室が依然としてあつた。お雪の坐つてゐた火鉢の前の座蒲團、お雪が昨日黙つて裏の畑から折つて來て生けた菊の花、衣紋竹にその人の姿そのまゝにかけてある不斷着、――

――お雪はまだ其處に居て、鳥渡便所か何かに階下に下りて、いつものやさしい小刻な足音を立て、トントン上つて來はしないかと思はれた。機嫌の悪い黙つたお雪の顔、伯父の家に行つての歸り途の月夜、橋の上に立つての久し振の感興、それが今に比べていかに離れた事實、いかに離れた心持をかれに與へたか。

其間には百年の年月も経たなければ味はれないやうな相違した寂しさが横つて居た。

外套も脱がずに其處に棒立に立つてゐる讓を見て、「讓さん今日は寝る方が好いよ。明日になれば私も一緒になつてさがして上げるから……さあ、休む方が好い」伯母さんはかう言つて、其處に積上げてゐる蒲團を敷いて『さア本當に休む方が好い。今夜は遅いんだから』

『え、寝ます』

かう言つたまゝ、譲はまだ立つてゐた。

『本當にさ……明日になりや分りますよ。お雪は身を躲したつて何處に躲れることが出来るもんですか。よく解るから』伯母は無理に譲に外套を脱がせて、傍にある寐衣に衣服を着改へさせやうとした。

譲は漸く氣が附いたやうに『伯母さん、心配かけてすみません……え、私がします、私が着改へます』かう言つて帯を解いて、手ばしこく寐衣を着て、轉がるやうに蒲團の中に身を入れた。

『それぢや本當に氣を落付けてお休みなさいよ。明日になりや、私も一緒に探して上げるから』やさしい伯母さんは、譲の顔を覗くやうにして言つた、寒くないやうに掻卷を叩いて、そして階下に下りて行つた。

その足音の消えて行くのを待つて、仰向に寐反を打つた譲の眼は、猶暫くの間大きく鋭く明いて居た。その眼は薄暗いランプの光に照された天井をぢつと見詰めて居た。夜はしんとしてゐる。通りを行く人の足音ももう聞えなかつた。やがて深い深い嘆息の音が聞えた。幾度となく寐反りを打つ氣勢もした。『馬鹿な奴だ！』と言つた言葉の中には、辛い苦しいあきらめられない男性の苦悶が名残なく現はれて居た。譲は今一度起きて、蒲團の上に坐つて、長い間ぢつと空間を見詰めて居た。

六

山の方に通ふ街道は、町の中頃から分れて、田だの、畑だの、小川だののある野を横ぎつて、遠くうね〜と續いて居た。機廻りの車が通つたり

早立の旅客が脚絆ばきで通つて行つたりした。朝日は晴れた晩秋の山々に美しい光線を漲らした。

路傍の木の葉を散らしたり菅原の中の赤い實をあらはに吹いたりするこがらしも、今朝は全く跡を絶つて、丘の麓にある百姓家の煙は静かに真直に立のぼつてゐた。繪のやうな静けさ！本當に繪からでもなければ味はれないやうな朝の静けさであつた。其の静かな平和な朝の道を、譲は騒しく波立つ心を抱いて彼方に往つたり此方に來たりしてゐた。

町外れから二三町行つた處に、一軒離れて休茶屋があつた。其處の上さんは、外套を着た二十四五の男から、朝早くいろ／＼なことを聞かれるのを不思議にした。昨日、此處を若い女が一人通つて行かなかつたか。ひさし髪に結つた脊の高い女は通つて行かなかつたか。ことに寄ると、一人で

はなく、二人づれであつたかも知れない。かうしたことを何彼ときかされた。上さんは三時頃からならば始終私が出で居たが、さういう女の人を通るのは見かけなかつたなどと話した。其男は上さんから不思議さうに顔を見られるのが辛さに「鳥渡其女に話したいことがあるんだが」などと言譯するやうなことを言つた。

『まあお入んなされや』

茶代を過分に貰つたので、上さんはかう言つて客に勧めた。柿を盆に載せたりなどして持つて來た。茶も幾度となく湯をかへて來た。

土地の人が通つて行くと、

『お早う』

などと上さんは元氣のいゝ聲をかけた。

客は朝日の袋を袂から出しては吸ひ、出しては吸つた。蒼い心配さうな顔をしてゐるのを上さんは見た。客は吸ひかけた巻煙草を捨て、慌しく通りに出て行つて見たりした。

譲はかうして二時間近く居た。日は段々長けて行つた。かれは自分のして居ることの馬鹿馬鹿しいといふことに氣が附き出した。こんなことをしては居られないやうに思はれて來ると、例の不安が烈しい力で再び頭を擡げ始めた。かれはそゞくさと其處を去つた。

かれの姿は再び町に現はれた。何う考へて見ても、乳母の家に居るとしか思はれなかつた。昨夜の乳母の態度も怪しかつた。一二度は逢つて知つてゐる間柄だ。何もあんなに冷淡な挨拶をしなくつても好い。……さうだ、確かにさうだ。かれは其方に向つて歩いて行つた。

町の通は明るい日影にかゝやいて居た。國旗がところどころに立てられてあつた。今日は新嘗祭だ。かう思つたかれは、今日の大祭日を何う面白く暮さうかと昨日考へて居たことを思ひ出した。お雪と一緒に何處かに行つて見やうかと思つて居た。一夜の中に俄然として變つて行つたかれの生活をかかれは考へずには居られなかつた。この人々の樂しむ晴れた暖かな大祭日をかうして歩いて居る身が情けなかつた。

郵便局の前を通つた時、兎に角里に電報を打つて置かうと思つて、中に入つて行つた。電報なんか打つたつて仕方がない。一方ではさういふ心の聲もした。奴等ぐるになつて遣つてる仕事かも知れないと思はれた。それでもかれは電報用紙を一枚貰つて、『オユキイヘデシタ、』と書いて銀貨をチャラチャラ音させて頼んで出た。

乳母の家のある横町にやがてかれは入つて行つた。ふと見ると、其の格子戸の前に後姿を見せて立つて居る女がある。紅い袖口が見える。帯が見える。お雪に似てると思ふと、此方に向いた。確かにお雪だ。かれは駆け出した。

此方を見た女は、慌て、家の中に姿を躲した。乳母は矢張居ないと言つた。

『居ないなんて言はせない。今日は騙されぬ。現に僕は見たんだ』譲は聲を震はして言つた。

『今、其處に居たのは、あれはお雪さんぢやござせん。あれは近所の女だ』乳母は飽きでもかくさうとした。

譲は争つて居る暇がない。蒼い昂奮した顔をして、ツカヅカ上つて行か

うとした。『お前さんも解らねえ衆だナ。居ないと言ふのに、ツカヅカ人の家の上つて來なさるか』頑固な乳母は高い聲で怒鳴るやうに言つて、譲の外套を引いた。

譲もかうなつては激さない譯に行かなかつた。

『このうそつき婆！』

かう言つて、かれはそれを振切つて奥に入らうとした。乳母は遣るまいとした。此處に忽ち一場の争闘が起つた。譲は忽ち鐵拳を振つて乳母の顔を打つた。『この野郎、打ちやがつたな』と言つた聲は高く四邊に響いて聞えた。其聲を聞き附けて慌て、裏から遣つて來た大工は外套を着た背の高い男に自分の喉が引摺られて居るのを見るや、いきなり飛蒐つて、滅茶苦茶に其男に打つてかゝつた。拳と拳とが一しきり空間に行違つた。近所

の人々は何事かと急いで飛んで来た。家の前には忽ちにして黒山を築いた。
『よくもうそをつきやがった。己のお雪を己が探すのに文句があるか』絶
えずから怒鳴る讓の蒼い顔は四邊に際立つて凄しく見えた。やがて巡査が
劍をチャラつかせて遣つて来た。

群集の中には、『何だ、上町の○屋の息子さんぢやないか』などと云ふも
のもあつた。

七

讓は本家から来た人達につれられて父母の家に行つた。かれは再び父母
の監督の下に置かれる身となつた。

町では其噂がそれからそれへと傳へられた。新聞にも書かれさうにした

のを、讓の友人達が行つて、漸くそれは揉消した。『外聞がわるい。逃げた
女房の尻を追つて歩くやうな子を持つて——』かう母親は恥かしさうに近
所の人達に言つた。父親は多くは黙つて居た。

讓は以前の六疊の間に起臥して居た。役場の方は病氣届を出してそれか
ら全く缺勤した。二十日間お雪と生活した二階からは、蒲團やら机やら本
箱やらがやがて送り歸されて来た。かれは日當の好い座敷にござりと横に
なつて、頬杖をついたり、組んだ手を後頭部に當てたりして、時間の經つ
て行くのを見詰めて居た。

痛恨、悲憤、忿怒、さうしたものゝが烈しい力で押寄せて来て、檻の中の
獣のやうに暴れ廻つた時のことがありくと眼の前に見えた。父母をも

罵倒した。兄弟をも突飛ばした。歸らぬと言ふのを無理に伴れられて来た時のあばれやうはなかつた。『親の世話になどならない。僕のしたことは僕がする。』かう言つて、譲は大道の真中で怒鳴つた。

かうした状態に到達したのは、皆な親達の手を下してしたことだ。家に居られないやうにお雪をしたのは誰だ。度々里に逃げて行くやうにしたのは誰だ。親達の氣に入るやうな嫁を迎へなかつたからとて——お袋が心で定めて置いたもののお多福を貰はなかつたとて、それで子はかういふ運命に邂逅せなければならぬのか。そんなことがあつて堪るものか。——反抗の念が時としては火のやうに燃えた。

親達の遣つたことが、時を經るに従つて段々譲にも解つて来た。初めか

ら親はお雪を出すつもりで居た。それで嫁の里や、その親類や、その周囲の人達などに對しても、打釋けた親しい態度を取らなかつた。さうでなければ、お雪か伯母の家に通げた時にも、向うから出て来た親類の人に對して、もう少し溫和な相談をしなければならなかつた。親達は始めからかうなる日の來るのを期待して、二階で暮した二人の二十日間の生活の破綻を待つて居たのだ。家に伴れられて来た時、譲は父親の顔を見て、『勘當した子息は構はないで放つて置いて下さい』かう叫んだことを思ひ出した。

お雪の里の方の意向も解つて来た。力になつて呉れてやさしいと思つた伯母も、譲を思切らしめるために熱心にお雪を説いた一人であつたといふことも知れて来た。かれ等二人は兩方の家に醸された危険な空氣の中に暢氣に日を送つて居たのであつた。

飽きも飽かれもしない二人の間を両方の親達が割いた。かう思つたかれは居ても立つても居られないやうな無念を感じた。女も憎い。後姿を見せ
て慌て、駆け込んだ女も憎い。しかしそれよりもさういふ態度にお雪を誘
つた行つた奴等が一層憎かつた。『只は置くものか。屹度思ひ知らして呉れ
る』かれはかう叫んだ。

『黙つて逃げて行くやうな女に未練を残すものぢやない』

母親は幾度もかう言つて聞かせた。

田舎の伯父も話を聞いてわざわざ出かけて来た。『わしはまた惚れ合つた
ものなら、東京に行つて暮すも好いと思つたが、女の方から出て行くやう

なのでは仕方がない。……いくらも好いのがある。お雪などよりもつと綺
麗な娘があるから、それを貰つて、見かへてやれ！男がそんなことにぐち
ぐちしてゐては仕方がない』から半ば慰めるやうに、戒めるやうに言つた。
友達などもそれに同じやうなことを言つて慰めた。ある友達はお雪の町
に出て居た頃の不身持などさへ話した。

火事の跡に雨が降つたやうな怪しい日が譲には続いた。激昂の後に絶望
の時が来た。かれは誰も心を知つて呉れるものゝないのを嘆いた。かれに
取つては、お雪の町に居た頃の不身持などは何でもよいのである。どんな
に容色の好い娘があらうとも、それに代へられるやうな手輕な苦痛ではな
いのである。戀人があらうがあるまいが、そんなことは問はないでも好い。
お雪の髪、お雪の眼、お雪の肌、お雪の肉體、それがかれにはなくてはな

らないのだ。未練？未練が何だ。世の中に笑はれる位は何でもない。男が
すたる位は何でもない。お雪さへ自分の傍に居て呉れたら――

女を憎む心と、女を憐む情と、女を恨む念とが縫れ合つて執念深くかれ
の胸に附き纏つた。そんなことはないとは知つて居りながら、昨非を悔い
て、女が詫びて歸つて來はしないかとも思はれた。

かれは毎晩のやうに夢に墮はれた。そしてそれは大抵刃物を女の肌にか
てたやうな夢であつた。白い乳房からは紅い血がだらだらと流れた。その
血潮に塗れた女の肌を抱いてかれは泣いた……

「一人、己一人だ！」

夜の臥床に入る時には、かれはいつもお雪を思ひ出した。樂しかつた月
日、それはもう過ぎ去つた。紅い房のついた枕に漲つた黒い房々した漆の

やうな髪、それはもう其處には居ない。あの髪と、あの肌と、あの肉體と
をもう誰れでも自由にすることが出来る！

かれは夜着を被つて歎けげた。

家の人達は、日數の經つのにつれて、讓の心の段々落附いて行くのを待
つて居た。成たけそつとして置くやうにもした。

讓は矢張蒼い神経性の顔をして居た。

十一月でなければ見られないやうな晴れた好い日が續いた。遠い山の頂
にはもう雪が白くかゝやいて居た。讓の居間の前の庭には黄い豆菊が一杯
に咲いて居た。

家で親類達が寄り集つて、讓の善後策について相談したのは、そのよく

晴れた日の一日であつた。何うも女がこの近所に居ては不安心だ。今の様子ではどんなことでも仕出かさないとも限らない。いつそ一年なり二年なり東京に出しては何うだ。かういふ話はその席上に出た。

『それが好い』

賛成するものも多かつた。

『東京ならよろこんで行くつて言ふかもしれん』

かう言ふ人もあつた。

父親が一應考へて見るといふことで、その相談の席は濟んだ。それからまた幾日か経つた。ある日、田舎の伯父が遣つて來た。伯父が讓にその話をするこゝになつた。

『何うだ、お前、そんなにしてくづくづして居るより、東京に行つて見る

氣はないか』

かう伯父が言つた。

讓は伯父の顔をぢつと見た。

『お前もみんなに前から行きたがつてゐたんだから、行つて見たら何うだ。行く氣があるなら、己が一つ父に相談して見てやるがなア』

讓は行つても好いやうな行かなくつても好いやうな養え切らない返事をした。そんなことは何うでもよかつた。

また幾日か経つた。

落附いた静かな氣分になつて行くのを家の人達も見た。此頃では以前のやうに物を言つても、返事をしないやうなことはなかつた。

唯さびしさうにして居た。

八

一夜、かれは友達に伴れられて町の遊廓に行つた。

春駒——さういふ女郎が其處に居た。かれがお雪をまだ妻にしない前には度々其の友達と一緒に其處に通つて行つたものであつた。多い其家の女郎の中では、小づくりな、色の白い、華奢な、やさしい女で、初會の時から讓には氣に入つて居た。

本を読むことが好きで、小説や雑誌を持つて行つて遣ると、何を貰つたより喜ぶといふ女であつた。他の女郎のやうに酒を飲んで騒いだり大口を利いたりするやうなことはなかつた。賑かな大勢な女郎の中にいつも獨り

さびしさうにしてゐた。

讓は雑誌に載つた自分の詩や文章をよく其女に讀んで聞かせた。可哀相な小説の一章を讀んで聞かせたこともあつた。

生れは山の向うの隣國で、此處に賣られて來る時には、馬に乗つて、さびしい高い峠を越して來た。裏の窓から雪に光る遠山を見ると、來た當座は故郷のことが思ひ出されて仕方になかつたなど、其女は讓に話した。

其中不圖したことからお雪と戀に落ちて、かれはすつかり其女のことを忘れて居た。

町から少し離れた處にある廓は賑かに灯にかゝやいて居た。三味線や鼓の音が到る處で聞えた。三階の大きな家の一間では、鉢巻をした客の躍つて居る影が鮮かに障子に映つて見えた。兩側に並んでゐる張見世は繪のや

うに綺麗であつた。

春駒はもう居なかつた。この秋の初めに、好いお客が出来て引かされて行つたとの話である。その弱々しいやさしい心に縋つてなりとこの醫し難い心を慰めやうとした儂い希望——それすら遂げることが出来なかつた。讓は浮かぬ顔をして、侘しさに坐つて、友達が酒を飲んで、女を傍に引寄せたり、調子外れの聲で唄をうたつたりするを唯黙つて見て居た。

綾衣といふ脊の高い元氣な丸顔の女がかれの相手として出た。「何だか浮かぬ顔をして居るねえ、此方は」などと言つた。友達が「綾衣さん、しつかり頼むぜ、その方は失戀して居るんだから」と言ふと、「失戀！ さうなの、本當に貴郎失戀？ 失戀なんか見つともないからおよしなされや」傍から女達がわいわい囁した。

それでも床にだけは入つたが、かれはすぐ其處から出た。かれはさびしい堪へ難い心を抱いて、田圃を通つて暗い町の暗い家の方へと歩いて行つた。

九

ある日の午後、かれの姿は町の大通から裏町へ出て、其處から島の中の細い道を通つて山の方に通ずる街道へと急いで歩いて行くのが見えた。

お雪が里に歸つて居るといふ報知を今朝かれは確かな人から聞いた。

こんな風にしては別れられない。是非一度女に逢つて心を聞かなければならない。かう思つたかれは、此頃家での監督が緩くなつたのを利用して、友達の家に行くと言つて、そして出かけて來た。

折々日影はさしたが、雲の多い風の寒い日であつた。路傍の萱や薄は枯れてガサガサと音を立て、居た。かれは急いだ。唯急いで歩いた。町の裏の後に見える中は、あとから追手でもかゝつて來はしないかと思はれて安心が出来なかつた。

かれの前には砂利の敷いてある路が長くうねうねと續いて居て、その向うには、高い山の下に小さい山が重なり、そのまた下には丘が幾つとなく重つて起伏して居た。最初の村の樹立の中からは、新しい茅葺屋根だの、高い半鐘臺だのが見えて居た。

近い山の半腹からは、處々の炭焼の煙が曇つた空に低く深つて居た。

かれは半鐘臺のところまで來て、ほつと呼吸を吐いた。此處まで來れば安心だ。かうも思つた。かれは其處に縁側の長い庭の廣い百姓家があつ

て、一杯になつて晩稻の收穫がひろげて干されてあるのを見た。その隣りの飲食店では、旅客が腰をかけて温饅頭を食つて居た。

かれはとある店で朝日を一箇買った。其處でかれは緩くなりかけた帯を締め直した。

其處からかれの心は全く女の方にのみ向くやうになつた。

『居るには違ひない』

かう思ひながら歩いた。

『逢はせるだらうか。……尋常では逢はせない。屹度逢はせないに相違ない。……しかし逢はずには置かない。逢はずに歸らない。……何も無理なことを言つて行くのではない。逢つてお雪の心を聞かせて貰ひさへすれば

三六
 好いのだ。親と親との権力で互の戀を割く、それが心外だ、それでは別れられない。それでお雪の心を聞きに行くのだ。無理なことは少しもない」
 さうしたことをかれは幾度となく心の中で繰返した。『しかしお雪が逢ふか何うか』時にはかうも考へた。『女の腹が腐つて居て、逢はなかつた時には何うする。……男の一分が立たなかつた時は何うする。それでも貴様はおめくくと歸つて来るか』

かう考へると、かれは苦しくなつた。心臓の鼓動が俄かに高くなつて來た。乳母の家での一活劇が再び繪のやうになつて眼の前にちらついた。
 女の心のほども疑はれた。友達が報告して行つた女の不身持が新しい事實となつて簇つて來た。友達の言つたのは手紙をよこしたあの男かも知れない。あの男との關係が切れないで、それであつて逃げて行つたのかも

知れない。肉の關係があつたのかも知れない。かう思ふと、男には解らない、女の淫靡な腐つた心が背と胸に迫つて來て、天も地も汚い不潔なもので充たされたやうな厭な不愉快なつき詰めた心になる……。

『そんなことはない、お雪はまだそんなに腐つた女ではない』
 考へるのが苦しいので、かれはかう獨りで辯護した。

『存外やさしい心持で逢つて呉れるかも知れない。あの時は申譯がなかつた。ついあつした行が、りでしたもんでしたから。かう言つて笑ふかもしれない』こんな風に思返しても見た。

路は綺麗な谷川に添つて居た。白く泡立つた瀬が見えたりかくれたりした。サアと流るゝ水の音が段々狭くなつて行く谷に反響して聞えた。

百姓が畑に出て居た。織物を載せた機廻りの車が幾臺も通つて行つた。鶏の群の餌をあさつて居る垣もあれば、新しく建てた家屋の荒壁のまゝ、人が住んで居るのもあつた。實を取つたあとの柿の木は枝ばかり際立つて四邊に見えて居た。橋の懸つて居る處もあつた。

お雪との戀が成立つて、此道を歩いた時のことが不思議にも譲にはくり返された。其時はどんなに愉快であつたらう。車で通つたこともあれば、歩いて通つたこともある。忘れもしない、里歸りに、峠の下に丁度車がなかつたので、其處からお雪は裾を端折り、自分は尻を捲つて歩いて来たことがあつた。其時、お雪は底髮に結つて、白いリボンをかけてゐた。何んなに楽しかつたらう。何んなに睦しかつたらう。戀を遂げた極樂境、體と

體とが一緒になつて、自分の見るものはお雪も見、お雪の喜ぶものは自分も喜び、自分の指さすものはお雪も指した。丁度四月の末で、山には櫻が白く咲いて、鶯が好い聲で鳴いて居た。譲はそれを文に綴つて東京の雑誌に投書した。雑誌の選者は、『里歸の若い二人の睦じさが眼に見えるやうだ』といふ批評を添へて翌月の雑誌に載せた。本當に蜜のやうな睦じさであつた。それが一年経つか経たないのに、こんな風になつて行くとは誰が思はう？

それからお雪を初めて見た時のこと、手紙を取交した時のこと、お雪の里の村にお祭があつて一緒に出懸けたこと——さうしたことが絶えず眼の前を繪巻物のやうになつて通つて行つた。鎮守の社の前の廣場に芝居の敷がかゝつて、田舎の見物がぎつしりそこに詰つてゐた。お雪とかれと並

Condemned a
young man

朝

んだ姿は人々の眼を惹いた。『あれが婿どんだとよ。えらいよう似合うた初
雛様だ』などといふ聲が絶えず二人の耳に入つた。……其時舞臺に出た定
九郎や勘平の姿とかれとお雪の並んだ姿とが一緒になつてかれの眼を掠め
て通る。どたどたした雑沓、大きな口を開いて物を食つてゐる百姓、酔ば
らつて成田屋など、聲をかける男……いろいろなことが縫れ合つて、こん
がらかつて、際限なく浮んでは消え、消えては浮んで来る。

かと思ふと、不思議な空想が果しなく起つて来る。氣が附くと、かれは
思ひがけないことを頭に描いて居た。群集を前にした廣場、一段高い處に
立つてゐるのは、死刑を宣告された若い一人の青年である。それはかれであ
る。かれは今死に臨んで一場の告別の言葉を述べやうとしてゐる。群集は
喚いたり叫んだりしてゐる。手を振り上げてゐるものもあれば、人をつき

てまいる別

飛ばして先に出やうとしてゐるものもある。野原のやうな都會のやうな處
で、背景には黒い雲が暮のやうに垂れ下つてゐる。集つてゐる人間も日本
人ばかりではなく、フランス人もドイツ人もロシア人も居るやうである。
かれの一言は満場の人の血を湧かせるやうなものである。かれの死刑宣告
は社會の大事件で、社會はかれに多大な同情を注いで居る。社會を動かし
た事件でこれほど大きな意味の深い事件はないと思はれて居る。……かれ
の一言一句は火である、血である。鋭利なる刃である。かれの告別の言葉
は始つた……この廣場に集つてゐる諸君……予は……予は……何も言は
ない中に、わツといふ聲が嵐のやうに聞える……群集の動くのが眼に見え
る……神よ……メシアよ……かれはいつか新しい使命を臨終の場に宣傳
する再生の基督になつてゐる……

矛のやうな槍がヒカヒカと四邊にかいやく。馬に乗つた異様な形相をした兵士が列を爲して向うの方を通つて行く。砂烟が黄ろく颯つて、それに反映する黒雲が一種凄じい色を呈してゐる。夕日が死のやうな厭な佻しい光線を投げてゐる……諸君、予が斷頭臺の露と消える光景をよく見ておくれよ……凄じい叫喚が手に取るやうに聞える。死の時刻の來たのを報ずる號砲があたりには響く。斷頭臺が厭な音をして動き出す……

重い苦しい氣分が續いた。氣が附くと、かれは街道から岐れた峠の方への道をたどつて居た。頭がガンガン痛む。お雪の顔が見えては消える。空は全く曇つて、雨になる前の暗い霧が、路傍の葉の落ちた林を罩めた。

峠の上の茶店——お雪と通つた時にいつも休んだ茶店、其處の婆さんは、

汚い外套を着て居る讓を、それとは氣が附かずに迎へた。冬になつてからは、近所の村のものが通るばかりで、茶店に休んで行くやうな旅客もなかつた。手が切れるやうに冷たいので夏は評判な前の清水も、徒らにチヨロチヨロと落葉の中に落ちてゐた。

かれは色の褪せた毛布の敷いてある縁臺に仰向に倒れて、長い間黙つて煤けた天井を見て居た。婆さんが何か言葉をかけたのを、温い茶を其處に持つて來たのを何も知らずに居た。

頭が絶えずガンガンする。

暫くして身を起したかれは、其處に萎びたさざ柿が五箇六箇置いてあるのを見た。かれは山坂を越えて來て、いくらか咽喉が乾いて居た。かれはそれを三箇ほど取つて自分の傍に置いた。婆さんは柄のついた切出しを其

處に持つて来た。

自分で皮を剥いて、旨さうにして食つたが、ふとその鋭利な小刀が氣に
 悪り出した。『さうだ、こいつを』と思つて見て、自分で自分の恐ろしい考
 を起したのに戦慄した。小刀はいかにもよく齒がついてゐた。

裏で誰か婆さんと呼ぶ聲がした。『あんだよ、今行くだよ』と言つて、婆
 さんはぐづぐづしてゐた。譲は柿の價を聞いて、白銅の銀貨を一つ其處に
 投出した。そして釣銭は要らないと言つた。婆さんは『有難う御座りやす、
 難有う御座りやす』と幾度も禮を言つて、草履をべたべたさせて、呼んで
 ゐる裏の方へ行つた。

『今だ！』

かれはかう思つて、其小刀を取つて、慌て、懐の中にかくして、そして

急いで其處を出た。一二間行くと、一散に驅出して、暫くは足を留めなか
 つた。其間にもかれは二三度振返つて見た。

少くとも七八町は驅けた。とある岩の角の處に来て漸く足を留めたかれ
 は、手の汗ばひほど堅く握りしめた懐の中の小刀を出して見た。齒の處が
 いかにも鋭利さうに見えた。これなら何でも出来る。かうも思つた。かれ
 は口の邊に凄い會心の笑を浮ばせた。

袂から紙を出して、何だか解らぬやうに、それを包んで、そしてまたそ
 れを懐の中に收めた。

かれは歩いて行つた。

其村に入つた時には、もう日が暮れかけて居た。雲は益々低くなつて、
 今にも雨が落ちて來さうに思はれた。畑には塵埃を焼く火が處々に燃えて、

赤く薄暮の空気を彩つてゐた。一日仕事に勞れた百姓達は、鋤や鍬をか
ついで家の方に歸つて行つた。

かれの前には、夕炊の烟に包まれた村が展げられた。白壁だの、檜の垣
だの、茅葺屋根だのが見えた。山と山とが迫つて、谷川の瀬の音が身に沁
るやうに聞えて來た。

かれは路に熟して居た。村の大通から傍道に入つて、それから少し行つ
たところが其の家である。青々とした大根や、菜などの畑が其前にあつて、
奥に草葺の大きな家屋が一軒ある。半分白く塗つた物置とも土蔵ともつか
ない建物がその右の方にあつた。廣場に面した長い縁側の雨戸はもう閉つ
て居た。

かれは暫く立盡して居た。胸がさまざまの考に戦へた。心臓の鼓動が自

分にも解るほど高くなつて來た。此處までは何も考へずに遣つて來たが、
かうして自分が直接に訪問するといふことは、いかにも突飛であつた。逢
はせて呉れるものも逢はせなくなる虞れがあつた。誰か第三者に頼んで話
して見て貰ふ方が順序よくもあり便利でもある。しかし此村にはさうした
親しい人もない。それに、人頼みでは成功した時は好いが、成功しない時
には自分で満足が出来ない。第三者を仲に立て、は十分に互に了解するこ
とが出来ないからこそ、かうして獨りで出懸けて來たのである。率直に訪
問しやう。歎願もして見やう。かう決心はして見ても矢張胸が戦へた。か
うした幕を演ずる役者としては讓はまだ餘りに若かつた。

人の足音が聞えた。讓はびつくりして傍の木陰に身を躲した。それは向
うの畠道を人が通つて行くのであつた。讓はほつと呼吸を吐いた。「ちつと

も躲れる必要はないぢやないか、馬鹿！』かう自分で自分を罵つた。けれど矢張躊躇せず居られなかつた。……さうかうして居る中に日が全く暮れた。腹の空いたのを感ずると共に、俄かに寒くもなつて来た。三里の山路に疲れ果て、も居た。

其家から誰か出て来る氣勢がする。その人は何か高い聲で話しながら出て来た。くゞりを明けた家の中には、風呂の火の赤く燃えてゐるのが鮮やかに見える。護はその出て来た人にお雪の居るか居ないかを聞いて見やうかと思つて居る中に、その足音はかれの躲れた木陰の横を掠めて向うに行つて了つた。あとはしんとした。

何時までかうして居たつて際限がない。かれは後からある力に推され、前からある力に引かれるやうにして、其家に通ずる路に出て行つた。井戸

の傍を通つて、その明るいくゞり戸の前に来てまた立留つた。何か賑かに話して居る聲がする。聞くともなく聞いて居た。と、急にくゞり戸が開いて、またそこから人が出て来た……前に男が立つて居るのを見て、出かけたのを止して、無氣味さうに、

『誰だな——』

護はどぎまぎして返事もしなかつた。と、其人は半分出し懸けた體の中に入れて、『誰かそこに立つて居るぞな——薄ッ氣味の悪い』かう今迄話して居た此家の召使の男に言つた。

召使の男は顔を出して見て、

『誰だな——何か用かな』

『町から来たんもんだが——誰か兄さんか誰かに……』

讓の聲は顔へた。

「町からッてばかりでは解らねえが、誰だな」

「町の菅井から来たんだが」

菅井といふ言葉はすぐ事件の輪郭を鮮やかに男に呑込ませた。闇に微白く出て居る讓の顔をもう一度見て、急いで奥に引返して行つた。他の一人の男は軽く挨拶して表へ出て行つて了つた。

奥に引込んだ召使の男は、容易に出て来なかつた。何かとたどたと話をしてゐる氣勢がする。表では讓の胸が烈しく波打つ。一分待つのも長いやうな氣がする。吉か凶か……長い間を置いて漸くに出て来たのは、お雪のすぐの兄になる男であつた。氣の毒さうに揉手をして、其處に立つた。「まア、上れ」とも言はなかつた。

「お雪に逢はせて頂きたいですが」

讓の方からかう切出すと、

「逢はせねえこともないですが……」少し言淀んで、「本當にお氣の毒ですが——わざわざ遠い處をかうやつて来て下さつたんで、逢はせて上げたいんですがな、逢はせられないやうな行懸りでがして……」

「それは知つてるんです。僕がかうやつて来るのが間違つて居るのは、自分でもちやんと承知して知つてゐるんです。そこを折入つてお願ひに上つたんだが——」

お雪の兄は氣の毒さうにして、「當り前なら、かうしてわざわざ来て下さつたのを『上れ』とも申さないなんて、そんな不人情なことは言はれないんでがんですが……今も貴方がお出だと言ふんで、爺やお袋とも相談した

んですがな……どうか、それは断つた方が好いと云ふんで……」また揉手をして、『本當に貴方にはお氣の毒でがんですが……』

『逢はして頂く譯には参らんでせうか』

譲は泣きたいやうな心持を押へて歎願するやうな調子で言つた。

『どうも道でないこんですから』

『決して危険なことなんぞしやしません。それは僕も悪いんだ。あんなことを乳母の家でしなけりやよかつただけけれど、ついはずみであんな具合になつて了つたんだから——何うか逢はして貰ひたいものですが』

『それは駄目ですがな』

譲は困つた風で暫し黙つて立つて居た。

『何うか不人情と思はねえで、今夜は歸つて下さい』かう言つて、兄はく

ぐり戸を閉めやうとするので、『もし、もし』

と譲は慌て、呼んで、『何うしても逢はせて呉れないでせうか』

その返事はなかつた。兄の奥に入つて行く足音がした。

譲は戸の傍の壁に凭りかゝつて歎息をついた。最後の絶望！何うせやうとは思つたが、想像したのと事實に打つかつたのではその絶望の度数が夥しく違つて居た。かれはかれの體が地上深く陥ちて行くやうな氣がした。絶望につゞいて忿怒の情も烈しく起つて來た。しかし一番かれの頭を刺戟したのは、お雪、こひしいお雪に逢ふことが出来ないといふことであつた。

お雪！ お雪！ 憎いお雪！ こひしいお雪！ かれの頭は鼎のやうに亂れた。

風呂の火は静かに燃えて居た。四邊はしんとして居た。

くゞり戸の一寸位閉め残してある處にかれはまた顔を寄せて、

『もし、もし』

から呼んで見た。返事がなかつた。

譲は歎息を吐いた。

『もし、もし』

暫くして又呼んで見た。

居ても立つても居られないやうな苛々した気分と、泣いても喚いても足

りないやうな気分とが混り合つてかれの全身を動揺させた。かれは何うす

ることも出来ない自分の身を先づ粉塵して了ひたかつた。

風呂の火がチラチラした。

『もし、もし』

また呼んだ。

今度出て来たのは總領の兄であつた。この兄は縣廳のある町に出て少

しは學問をしたことがあるので、譲とは話も合へば、氣質も合つて居た。

『ヤア、兄さんですか』譲はわざと碎けて出て、『本當に申譯がないんで

す……』

『でも君、無理は言はずに、今日は歸つて呉れ給へ。』總領の兄は直截な調

子で、『逢はせられるものなら、お互にこんな思ひをしないで逢はせるよ。

僕の方だツて困るんだから』

ふと東京行のことが譲の胸に浮んだので、

『實は兄さんだから言ひますが、僕も東京に行くことになつたんです。彼

方に行けば、逢ふことが出来ない。何うかそれまでに一度逢ひたい。そして別れるものなら、綺麗に別れたい。お互に心を残さずに別れたい。かう思つて爺やお袋には黙つて来たんです。何うか、兄さん、一度、僕の兄さんになつた好情で、お雪に逢はせて下さい。鳥渡でも好いですから」

兄は困つた風で暫らく黙つて居たが、

「兎に角、今日は爺もお袋も困るツて言ふんだから……それは君には氣の毒だが、今日は溫和しく歸つて呉れ給へ。君も男だ」

護はその言葉に少しく激したといふ風で、

「ぢや、私の来たことをお雪に知らせて下さい。私がかう遣つて来たことを知らせて下さい。それで逢はないと言ふんなら好いですから」

「それは知らせるけれど」

「まだ知らせてないんでせう。……一體、親だの兄弟だのが、自分達の家に都合がわるいと言つて、飽きもあかれもせぬ仲を」

「まア、そんなことは此處で言はんでも解つてるよ。兎に角、君が遣つて来るといふことが道でないだ。僕等にしても、君に今此處で、しかも夜、妹に逢はせることは出来ない」

「兎に角お雪に知らせて下さい」

堪らなくなつたといふやうに、護は聲を擧げて泣出した。

沈黙が続いた。

兄も黙つて立つて居る。

「清太！」

奥から父親らしい聲で呼ぶ聲がする。

「清太！清太！」

兄は引返して行つた。奥で何か話をする氣勢が續いて聞えた。しかしそれもやがて絶えて跡はしんとなる。

譲は拳で涙を拭ひながら下唇を堅く堅く嚙んだ。女が憎い……かういふ目に逢はせる女がつくづく憎くなつた。知らないでゐるのか、そんな筈はない。己が來たのを知らないでゐる筈がない。お雪が變心したに相違ない。あの淫婦！

一方ではまた人の情の頼み難いことをつくづくと思ひ當る。義兄と頼んだ人、舅姑と頼んだ人、その人達が婿と呼ばれた男を、たとへどんなことがあろうとも、この掌をかへしたやうな取扱は何事だ。上れとも言はな

い。遠い山坂を越えて來てさぞ勞れたらうとも言はない。腹が空いて居るだらうとも言はない。只歸れ、歸れとは何事だ。

『もし、もし』

また呼んで見た。

くぐり戸をがたがた言はせた。

矢張何の返事もなかつた。

かれは猶暫く其處に立つたり蹲踞んだりして居た。ふとお雪の居る氣勢でも聞きたいと思つた。譲は中庭を通つて、こつそり裏の方へと廻つて行つた。

其處に廁がある。其處の雨戸も堅く閉つてゐるが、隙間から灯がちらちら見える。かれは其處に立つて、黙つて耳を聳てた。矢張何の物音も聞え

て来ない。しんとしてゐる。

其處の六疊、其次の八疊で、里歸りの祝ひをした。親戚達が其處に大勢集つて、酒を飲んだり唄を唄つたりした。忘れもしない、その六疊は其夜二人が寝たところだ。何んなに二人は睦しかつたらう。何んなに二人は楽しい私語に耽つたらう。二人は其夜は終夜目覺めて居た。……お雪は居るに相違ないが、その氣勢位はしさうなものだ。かう思つてかれはまた呼吸を殺して耳を立てた。矢張何の音もしなかつた。時計のセコンドの音が聞えるばかりであつた。

……腹が堪らないほど空いて居た。……とても駄目だ。怖い、怖い女だ……一家塵殺にして呉れなければ腹が醫えない……覺えて居る……屹度この怨はかへして呉れる……かう思ふと、一方では闇の中にかうして立

つてゐる自分が馬鹿々々しくも思はれる。ふと氣が附くと雨がぼつたりぼつたり降つて来た。

俄かに人聲がしたと思ふと、

『あきらめて歸つたと見える』

『何處にも居ないか』

『何處にも居ないやうだ』

『あゝいふ思詰めた人間は何をするか解らんぞな』
かういふ二三人の會話が聞えた。

闇が一ところ明るくなつて、やがて其處に提灯が見えた。

かれは見つけられまいと、勝手を知つてゐる裏の方から、竹藪の中を通つて、芥溜の傍を抜けて、勝手元のところへと行つた。何うせ今夜は駄目

だ。兎に角此處を去らうとかれは決心した。畠から垣を破つて通りへ出た。

雨は繁く降つて来た。腹は空いて居る。體はへトへトに疲れて居る。もう何うでも好いといふ氣にもなつた。かれは知人のないこの村で、何處に食を求め、何處に寝る處を求めるといふことを考へる力もなかつた。かれは闇の中の樹の幹に身を凭せてボンヤリしてゐた。

ふと友達の親類で、里歸の時の祝宴に列つて居た農家を思ひ出した。かれはその方に足を向けた。

十

葉を打つ音が何處かでして居る。暗黒で道も何もさつぱり解らない闇の

中に、ぼつとり灯の影が見えた。かれは入口らしい處を漸く探し當て、案内を乞うた。

葉を打つ音が矢張して居る。

『御免なさい、御免なさい』

それでもまだ返事がない。

『御免なさい！』

漸く奥から誰か出て来る氣勢がした。やがて薄暗いランプを手にして、六十位のお婆さんが姿を現した。障子の破れて居るのが洋燈の光にそれと見えた。

『誰だんべい』

お婆さんはすつかり忘れて居た。名告つても解らなかつた。頭の髪の毛

から全身雨にぬれて立つて居る男をお婆さんは怪訝さうに見た。

仕事場の方に行つて、

「誰だんべい。菅井ッて…達の友達だッて言んだがな」

葉を打つ音がぱつたり止んだ。「菅井？あれだんべい、それ、其處の清太の妹の婿殿だんべい」

「さうだ…やつと思ひ出した。お雪姐の旦那だ…まア上らつしやれ」

躊躇する場合でもないので、讓は点滴の垂れる外套を脱いで其儘上らうとした。洋燈の光で見ると、足袋も夥しく泥にまみれて居た。で、かれはそれをも脱いだ。

「御迷惑でも今夜一晩泊めて戴く譯には行かないでせうか」

讓はすぐかう言出した。

「何故や？本家さア泊つたら好かんべいがな」

「泊める處か、内にも入れて呉れないんだ！」

「お雪の姐、昨日見えたつけがな」

讓は掻いつまんで其話をした。

たまげたやうな顔をして、婆さんはそれを聞いてゐたが、「さうかな、それでかな、お雪の姐の此頃ちよいちよい見えると思つたのは、…ふむ、…さうかな、内にも上げねえ。犬猫のやうにして追かへした。それはさぞ困らつしやんつたんべい…」

て、婆さんはまた仕事場の方に行つて、その話をした。低い訥るやうな聲が暫しの間聞えて居た。「わざわざな、来たものを、一目位逢はせたッて

よかりさうなもんだにな……この雨の降るのに』かう言つた婆さんの聲が
高く聞えた。

『本家のやうな綺麗な寝道具は無いが、それさへ構はねえけりや、泊つて
行くくれえ何でもねえだが……』婆さんは其處から出て来てかう譲に言つ
た。

『何うか、一晚泊めて下さい。御恩は忘れませんから』

譲は蘇つたやうな氣がした。

『やれやれ、えらい眼に逢ひなかつたな』婆さんは、火鉢の火をかき起し
ながら、『まア、こつちに寄んなされ。寒かつたんべい。山はもう寒いだ……
さうかな、此頃、達にも逢ひなかつたかな……丈夫で居るだんべいな……
この正月には来るツて言つてゐたが、あれも忙しい體だからな』鐵瓶に觸

つて見て、

『丸で水だ。少し待ちなれ。今すぐ沸かすで』かう言つて勝手の方に行か
うとした。

『お婆さん、まことに申兼ねるけれど、僕はまだ飯を食はなんだが……』

『飯？夕飯をな』驚いたやうに、『飯も食はせないのかな』

『飯どころか。戸の内にも入れないんですからねえ』

『それはまア腹が空いたんべい。何にもありアしねえが、わり飯に漬物位
はあるだ』

やがて婆さんは立つて行つた。勝手に七輪に火を起す氣勢がした。

譲は顔に掌を當て、今夜の活劇を思ひ出さうとするやうに深く深く考
へ込んで居た。義兄弟や舅姑達に引かへて、他人の親切をも考へずには居

られなかつた。思はず歎息が出た。

仕事場の方で、膝をバタバタと叩く音がしたが、やがて岩乗な脊の高い爺さんが障子をわけて此處に入つて来た。

『今夜は飛んでも無いお厄介をかけまして……』それと見ると、譲は丁寧に挨拶をした。

かれは爺さんを相手に種々な話をした。別れるやうになつて行つた一伍十什、雙方の親達の感情の齟齬、今夜の出来事、最後に東京に行くといふことを事實のやうに話して、『ですから……もう東京に行けば、何年にも逢はれるか逢はれないか知れないから、一度逢つて、此方の心も話して、別れなけりやならないものなら、止むを得ないから別れるとしても——一度逢ひたいと思つてやつて来たんですが、何う思つたか、危険にでも思つた

のか、いくら頼んでも承知して呉れないんです』譲はから爺さんに話して聞かせた。

『明日にでもなつたら、向うでも逢はせて呉れるかも知れないから、餘りくよくよ思はない方が好いだ』人の好い爺さんは、譲のをりく激昂する様子を見て同情してから慰めた。

『わしが言つて上げてても好いだ——ちやんと譯が分つてゐるんだでな』爺さんはかうも言つた。

婆さんは其處に夕飯の支度をして持つて来た。大根の味噌汁の臭ひが譲の餓えた食慾を刺戟した。菜の漬物、玉子、茶碗には挽割の飯が山盛にしてあつた。

『町の衆にや食へるやうな飯ぢやあんめいが、たんと食つてくらつしやれ』

婆さんはかう言つて勸めた。

平生なら咽喉にも通らないやうな飯も、餓ゑた腹には旨く食へた。三杯までお替りをして譲は箸を置いた。

話が多た續いた。

『精太の處でも餘りだな——あの父さんも解らねえからな』

婆さんはこんなことを言つた。

『何アに、夜だもんだで、薄ッ氣味悪く思つたんだんべい。……明日、己が行つて聞いてやんべい。……東京に行くに、別れに來たに、逢はせねえツていふ法がねえ。』

爺さんは茶を飲みながら、事もなげに言つて笑つた。暫くしてから、再び仕事場の方に立つて行つた。

葉を打つ音がまた聞え出した。

譲は勞れて居た。今日のことは今日、明日のことは明日といふ氣になつて居た。火鉢の火の温氣と、食慾の飽滿とで、眠氣が頻りに催して來た。

婆さんが膳を片附けて其處に來た時には、疊の上に突伏して、半ば眠に落ちて居た。

『もうやすまつしやれ』

婆さんに起されて、かれは次の六疊に行つた。其處には綿の固くなつた蒲團が敷いてあつた。かれはごろりと横に倒れて死んだやうになつて熟睡した。

外では雨が音を立て、降つて居た。

讓の話は少なからず爺さんや婆さんの同情を惹いた。翌朝、蒼い顔をして讓が縁側に立つて居ると、婆さんは其處に来て、「くよくよ思はつしやんなよ」などと言つた。昨夜とは打つて變つて好い天氣であつた。朝日の軒には元氣の好い雀の百囀が聞えた。

『もう一度行つて見ませう』朝飯を済してから讓が言ふと、「なアに、お前さん行くより、爺さんが行つて話してやるとよ。……お前さん、なまじひ行かねえ方が好うかんべ」婆さんはかう言つて留めた。

讓は朝日の當る暖い縁側に寝ころびながら、矢張そのことを考へて居た。もう終結が近づいたやうにも思はれた。爺さんが行つて話しをして来て呉

れるにしても、もう再び元の鞘に収るやうなことはあるまい……かう思ふと町から山を越えて来た昨日と、一夜過ぎた今日との間に夥しい状態の變化と感情の差違とをかれは認めた。女の心も分明解つたやうな氣がした。焦立つやうな神経の昂奮よりも堪へられない怪しい辛い暗愁を身に覺えながら、讓は縁側の節穴を數へたりして居た。

『爺さんが話して呉れて、此處にお雪を連れて来て、東京に行く爲めの別れの言葉を述べ得るに過ぎないのだ。……別れ……別れの言葉……別れの言葉を述べて他人にならなければならぬのだ。他人に……お雪と自分とが他人に……』かう獨りで繰返して、かれは其の言葉の持つて居る意味を翻つて考へて見た。自分は自分でこの苦痛を何うかしなければならぬ間に、お雪はその昔の戀人なり誰なりの妻になることが出来る……小鳥の

影が障子に移つて枝から枝へと飛んで行つた。譲は長い間身動もせず、其處に横になつて居た。

三三

庭の隅にはそれでもまだ黄い豆菊が霜を帯びて残つて居た。圃の側にある脊の高い南天燭の實や、葉は落ちて實の赤いのが際立つて見える錦木や枝ばかりになつた柿の木や、さうしたものには日影が鮮かに照つた。畑の大根や菜は青々として居た。

爺さんが羽織を着て出かけて行つた間を、譲はそはそはと落附かないやうに見えた。其姿は縁側の處に見えたり、柿の木の下に見えたり、裏の方に行つたりした。仕事場の戸の少し開いてゐる處に半分頭を入れて、中を覗いて見たりした。其處には藁を打つ石があつて、藁が一杯に散ばつて居

た。

堪らなく頭が痛むといふやうに右の拳で後頭部を叩いて居たりした。晴れやかな明るい光線の漲つた庭の中に、譲の鬚の生えた頭髪の亂れた蒼い顔が際立つて見えた。

元氣な婆さんは、井戸端に盥を持ち出して洗濯を始めた。枯棒の動くが地上に映る影と共にギイギイ聞えて、やがて水をあける音がした。暫くして譲が其處に行つて見ると、織の當つた紺足袋と白足袋とが堅く絞つて盥の傍に置いてあつた。婆さんは爺さんの襦袢を洗つて居た。

『忙しいもんだで、洗濯がたまつて』

などと婆さんは言ひながら、ひの切れた手でどしどしやつて居た。時々表の路を人が通つて行つた。『お婆、朝から精が出るね』から聲を懸

三三

けて通つて行くものもあつた。傍にブラブラしてゐる此處の子息とも違ふ若い男を振り返つて見て行く人もあつた。

やがて婆さんは二三枚の洗濯をすまして、それを持って向うの方に行つた。樹と樹との間に一筋の繩が引いてあつた。その繩の綱目の間に婆さんは先づ足袋を一つ一つ挟んだ。解いた衣服と褌袴とは小屋の傍の日當の好い處に持つて行つてかけた。其處の荒壁にはひばなどが吊されてある。

讓の顔を見て、

『何うしたんべ。爺さん、えらう遅いが、話が難かしいんだんべいかな』
こんなことを婆さんは言つた。

讓はまた縁側の方に行つて、長い間其處に腰をかけてゐた。障子に映つた日影が段々低くなつて行つた。何處かで薪を割るやうな音が聞えた。

やがて泥濘の深い道を拾つて、疎らな垣の方に寄りながら、爺さんの歸つて来る姿を見ると、讓の胸はまた烈しく動悸を打ち始めた。

『やれ、やれ、話が難かしくつてな……解らない奴ばかりゐるから仕方がねえ』かう言つて爺さんは入つて来た。

婆さんは迎へて、

『それで、何うしたッ？』

『やつと、それでも話して来た。爺さんが折角さう言つて仲に入つて呉れるんだからツてな。清太がつれて、鳥渡此處に逢はせに来る筈だ……やれやれ、骨の折れた話ぢや』かう言つて爺さんは讓の方を見た。

清太に伴れられてやがてお雪は来た。

お雪は底髪に結つて居た。銘仙の烏波した衣服を着て、緋子と縮緬との派手な帯をしめて居た。色の白い上に薄く化粧をして来たので、常よりも一層美しく見えた。

『いつも綺麗な姐御ぢやな』

こんなことを婆さんの言ふのが聞えた。八疊と六疊との仕切の襖は閉めてあつた。それを待設ける爲めの六疊は綺麗に掃除がしてあつて、中央に火の活々と起きた火鉢が置いてあつた。爺さんの信仰する宇賀神の蛇のとぐるを巻いて鎌首を高く揚げた掛軸が其處にかゝつて居た。その六疊に譲は居た。

爺さんや婆さんや清太の聲が入り混つて聞えた。挨拶が長く続いた。『今

度は飛んだことで御厄介になりました、本當にすみません』かういふお雪の聲もした。

爺さんが先づ入つて来た。そして四邊を見廻してまた出て行つた。襖は其時明けたまゝになつた。座敷の隅に坐つてゐるお雪の帯が此方から見えた。

爺さんと清太とがやがて入つて来て、その後からお雪が続いた。お雪はちらと其處に坐つて居る譲の方を見たが、そのまゝ眼を外して、俯向き勝に隅の方に小さくなつて坐つた。

日影に遠い裏になつてゐるやうな室であつた。明るい八疊から入つて来ると、暫しは物が分明と見えなかつた。皆な挨拶をしただけで暫く黙つて居た。

其處に婆さんが茶を運んで来た。

『昨夜は失禮しました』清太が一番先に口を開いた。『君には氣の毒だツたけれど、今の場合何うもさうは行かないんでね』

『え、僕も失禮しました』かう言つた讓の聲は少し顫へた。

『まア、此方も東京に行くツて言ふんだしな、…縁がなくなつて、かういふことになつたんだから、誰も悪いツて言ふものはないんだから、綺麗に心残りのないやうに話してな…』爺さんはゆつくりした調子で、『何うもな仕方がない。なア清太さん』

『え、え』

清太はかう言つて聞いて居た。

『お雪やんも此方に寄んなされ』

婆さんも傍から言つた。

清太と讓とはやがて打解けた口の利き方をした。何時東京に行くの、何年位行つてゐる積かなどと清太は訊いた。『幾年で歸つて来るか解らないんです…私のやうなものには、何うせ何も出来やしないんですから』などと讓は言つた。

『また、彼方に行つたら、時々手紙をくれたまへ。僕は君に對しては悪意なんか持つてやしないんだから』清太はかう言つて、『僕もその中出かけて行くかも知れない』

何か事件が起りさうなどとは何うしても思はれない柔かな話が一座の中を賑かにした。婆さんが出たり入つたりした。茶菓子なども出た。

やがて清太も爺さんも其處から出て来た。あゝいふ調子では、そんなに

心配をすることはないと清太は思った。清太は火鉢の傍で、今年の漬菜のよく出来た話などを爺さんとして居た。

六疊と八疊との間の襖は半ば開けてあつた。お雪の坐つてゐる姿は半分ほど清太にも見えて居た。やがて二人の何か話して居る聲が小さく聞え出した。

『僕の心持は解らないんだね』

譲のから言つた聲がした。

『だって、私だって……』

漸くしてから、お雪のから何か辯解するやうな聲が聞えた。

また低い聲が続いた。

『ぢや何うしても歸つては呉れないんだね？』男の聲が高く鋭く聞えるか

と思ふと、『あれ——』といふ女の悲鳴が聞えた。清太も爺さんも吃驚して立つて行つた。

顔を押へたお雪の顔からは血がだらだら流れた。

別
れ
て
か
ら

別れてら

親しい友達は段々其處に訪ねて行つた。

「停車場から五町、牛舎の向うの斜阪の上にある小さい家」かう端書に書いてあつた。成程五六匹の牛の寐轉んで居る牛舎がある。道路に添つた處に樹木の茂つた芝草の斜阪がある。茅葺の小さい屋根は其中に埋れるやうになつて見えてゐる。

「これはしやれた處だね。誰かの別荘にでも造つたものと見えるね」

から友達の一人は言った。

一人の友達は、運わるく丁度主人が散歩に出かけた留守に遣つて来た。秋の日影の明るく射した八疊の間には、本だの雑誌だのが散ばつたままになつて居て、案内を請うても返事をするものがなかつた。その友達は縁側に腰をかけて暫く四邊を眺めてゐた。

新宿の女郎上りだと言ふ大工の娘が、その入口の處の一間しかない小屋のやうな家に住んで居た。其處に下りて行つて聲をかけると、上さんは窓の處から顔を出して、『なアに、散歩に行つたんですよ。ぢき歸つて来ますよ。上つて待つて入らつしやい』から言つて、客と一緒に上の家に遣つて来て、勝手の七輪に火を起し始めた。

『え、え、私が御飯だけ炊いて上げるんです。こちらの方は、それは寐坊

ですからねえ。黙つて放つて置けば、お午までは屹度寐てるますよ……。そのかはり、夜は随分遅いんですから。一時位まで、雨戸も閉めずに、灯が點いてゐることがよくありますよ。一度、餘り氣になるから、私がそつと来て見ると、机に向つてちやんと勉強してゐるんですもの。勉強するなら、晝間したら好いと思ふんですけれども、矢張夜でなくつては駄目な稼業なんですつてね』話好きな上さんは、誰でも構はずこんなことを饒舌つて聞かせた。

あたくかな午後の秋の日影に照されながら、縁側に腹這ひになつて、客は新刊の雑誌などを見て居た。モウモウといふ牛の聲が時々向うから聞えて来た。上さんは縁側の一隅に腰をかけて、いろいろなことを話しかけてゐたが、七輪の鐵瓶が俄に白い湯氣を立て、沸き出したので、急いで立ち

上つて、番茶を淹れて、客に出して勧めた。

書棚の傍の柱には、束髪に結つた、眼の綺麗な、十八九の丸顔の女の寫眞が、草色を縁にした立派な寫眞袂に挿まれたまゝ、懸けられてあつた。それを上さんは外して来て、『これがこちらの方の前の奥さんだつて、本當ですか』などと訊いた。

此家の後には、廣い野原が続いて居た。櫛や栗の林が多かつた。路がうねうねと丘と丘との間を縫つて、思ひもかけない處に五六軒の百姓家があつたり、小さい川が流れてゐたりした。昔、誰かの邸宅であつて、すつかり荒廢した跡とも思はれる池や築山などもあつた。

野に働いて居る百姓達は、竹の根のステッキをついた何方かと言へば

丈の低い瘦せた三十前後の一人の男の散歩姿を到る處で見た。林の中の細い路からヒョククリ出て來ることもあれば、畑に添つた路に立つて、塵埃の山の燃えるのをぢつと見詰めてゐることなどもある。レールの上に架つた橋の上から白い烟を立て、汽車の遣つて來るのを見てゐることなどもあつた。大抵、ステッキを抱へて、凝と物を思ふやうにして歩いてゐた。

林の私語や、小川の流ぬ、静かな百姓家や―さういふものをかれは求めるやうにして歩いた。かれは靜かに物を考へたいとばかり思つて居た。

かれは百姓に話した。

『今年は豊年でしたらう？』

『いや、駄目ですア』野にある人達は、腰を延すやうにして、こんなことを言つた。

百姓の娘は、莞爾しながら、かれの散歩姿と摩れ違つて行つた。
 時にはかなり遠い處まで出かけて行くこともあつたが、其日はいつも行く池の周圍を一廻して、林に透徹る秋の日影の中に暫し坐つて、それから俄に歸りたくなつて歸つて來た。
 縁側に寐轉んで居る友達の姿を見て、かれは喜悅の聲を擧げた。

二

近所に居る友達も來た。
 夕日があたりを照して居た。樹の影が黒く地上に落ちた。垣に傍つた路を通つて行く荷車の音が靜かに聞えた。
 やがてランプの灯は八疊の間を青白く照した。大きな机の上の書籍や

三

雑誌を片附けて、其處に大工の上さんがカレー粉を交ぜた炊き立ての飯を大きな皿に山盛にして運んで來た。人達はスプンを手に旨さうにして食つた。お仕舞になつた時には、戸外はもう全く暗くなつてゐた。
 歸る時には、かれは友達を送つて、水車のある橋の處まで出かけて行つた。若々しい笑声は垣に添つたり牧牛場に添つたり星のうつる水田に添つたりする闇い田舎道を暫し賑かにした。
 『加藤君、大分落附いたやうだね』
 『好い鹽梅です』
 二人の友達は別れて少し來てからかう言つた。

加藤は家に入る前に、入口の大工の許に寄つて見た。大工の礎さんはまだ歸つてゐなかつた。上さんは三分の洋燈をつけて其處に坐つてゐた。

『今日は賑やかでしたね』

などと上さんは言つた。

加藤は暫し黙つて其處に腰をかけてゐた。何となく家に歸るのがさびしかつた。夜の空氣が静かな思出をかれの胸に誘つて來た。

『つまらんなア』

思はず知らずさうした言葉が口から出た。

『本當に獨ぢや淋しいでせうね。……』上さんはかう言つて、『一人お持ちになつたら好いぢやありませんか』

『さう簡單には出來ないからな』

『それもさうね、あんな綺麗な奥さんがまだ家に待つてゐてはね』

戲談らしく上さんは言つて笑つた。加藤は黙つてゐた。

暫してから家の方に歸つて行くかれの姿が見えた。點けたまゝにして置いた机の上のランプは夜風にチラ／＼した。四邊の樹木の葉裏はその餘光を受けて明るく照つてゐた。

かれは先づ縁側に腰をかけた。

種々なことが思ひ出された。二年足らずの年月が、何んなにかれに辛い、悲しい經驗を興へたか知れなかつた。かれは思ひもかけない人生の一面に觸れて、悶えたり悲んだり、苦んだりする人であつた。かれは今靜かにその二年間の年月を翻つて考へて見た。自分ながらよくもその火水の中を通り抜けて來た。よくもその苦悶を過去のことのやうにして考へるまでの餘

裕が出て来た。……ふと何も彼も逸早く過ぎ去らせて了ふ時の力といふことが頭に上つて来た。かれは堪へられないさびしさを總身に覺えた。

別れてから——女が家出してからもうかれ是れ五ヶ月になる。其間の苦悶は？ 苦痛は？

かれは絶えず短刀を懐にして、女に邂逅し次第、其の胸に恨みの刃を當てなければ承知が出来ないと思つたことさへある。また

時には自分等二人の間に入つて、二人の仲を割かうとした奴等を片端から

斬殺して呉れやうとまで憤怒の思ひに燃えたこともある。かれの戀には、

傷けられた男性の矜持に對する恕すべからざる屈辱があつた。

かれは病院の一室で最後に女に逢つた。白い寐臺……白い女の顔……女

は涙を流して詫びた。それは虚偽の涙であつたではないか。

『貴郎の爲めにも、當分一緒にゐない方が好いから。』

私は外部から貴郎

郎を助けることにしますから』

其時、女はさう言つた。さう言つて置いて、女は身を躲して了つた。

友人や先輩が心配して、靜かに考へるやうにする方が好いと言ふことに

なつて、無理につれて行かれた京都の三ヶ月——かれは嵯峨に近いある農

家の一間にさびしい辛い日を送つて来た。仁和寺の山門の上に蔽ひかぶさ

るやうな鮮かな新緑、愛宕道から炭を脊負つて下りて来る田舎娘、自分の

居る室から雨の降る日にも晴れた日にも見える妙心寺の屋根、地響をさせ

て通つて行く丹波への汽車、中でも忘れることの出来ないのは、自分が世話

になつた先輩の懇意にしてゐる家の娘であつた。娘はもう二十位だつた。純

なやさしい京都辯で、いろいろなことを話して聞かせて呉れた。髪の濃い、

眼の綺麗な娘だつた。その娘と娘の父親と先輩と一緒に伴立つて嵐山に行

つたことなどもあつた。娘は男の苦悶の原因を知つて居て、何ぞと言つては慰めて呉れたりした。そんな女ばかりではありませぬといふやうな語氣を洩したこともあつた。それが男の心に深く残つて居た。今でも残つて居た。

其時、娘は手を舟縁から透徹るやうな水の中に浸して居た。水は新緑の色を帯びて、一層濃い碧を呈してゐた。娘に近く座を占めたかれは、娘が楽しさうな笑ひを顔に漂へて、ぬれた手を手巾にふいて居るのをちつと見てゐた。

かれは心の轟くのを覺えた。かれは死ぬほど戀ひした女の外に猶ほ他の女を思ふことが出来るのを不思議にした。

『しかしこれは戀ではない。女に對する廣い同情だ』

かれはかう思つたのを今でも覺えてゐる。

かれは縁側から座敷に上つて、真中に引出してゐる机を床の間に添つた一隅へと押附けてやつた。渠は机の上に置いてゐる洋燈を前にして坐つた。

遣らなければならぬ仕事は澤山にあつた。某雜誌に送らなければならぬ翻譯のべ切はもう明後日である。某雜誌の文叢欄は明日までまゝとめて送つてやらなければならぬ。それに翻譯しかけた叢書の仕事もある。かれはそれに着手する前に、先づ日記を書いた。

日記は野紙を綴ぢ合せたもので、今年だけでも、もうそれがかなり厚くなつてゐる。時には、一日の感想を十枚も二十枚も書くこともあるが、今日は五行ほど書く、と、パツタリ筆を措いて、巻煙草を一本スバ〜と旨

さうにして吸つた。

再び筆を取つたかれは、原書を傍に、原稿紙を前にして一字一字書いて行つた。始めてからは容易に筆を留めやうとしなかつた。家の周囲には、夜の暗が轟と押寄せて、をりをり風がガサガサと窓の外の寒山竹を動かし行つた。

笠を深くかけた洋燈は、机の周囲を照すだけで、室の中はぼつと薄暗くなつて居た。それにも拘らず、柱にかけた寫眞は、丁度かれの大きな影の頭の處あたりには、分明と浮出すやうに見えてゐた。

かれが筆を捨て、後頭部に掌を當て、仰向に身を倒した頃には、もう餘程夜が更けてゐた。

氣が附くと野を過ぎて行く風の音にかかれは耳を絞て、居た。

かれはこれまで深夜に眼覺めて、何んなに深く強く女のことを思つたかといふことを考へずには居られなかつた。殆ど毎夜——ある時などは自分ながら自己の考の恐ろしいのに戦慄して、それをまぎらす爲めに深更に戸外に出たことさへある。時には、女が後悔して自から此處に遣つて来て、今、戸を叩かうとしてゐるのではないかといふやうな想像に驅られて、わざ／＼雨戸を一枚繰つて見たことなどもある。何故女には男の心が解らないのか。何故、これほど思つて居る心が女に通じないのか。

何故に女はかれを捨て、去つたかといふことが、今でもかれには解し得られぬ疑問であつた。樂しかつた半年の海岸生活、そこに暗い影が潜んでゐるなどとは夢にも思はれない。東京に歸つて來てからの生活にも、女の家出を促すやうな際立つた事件やこんがらかつた葛藤があつたとは思はれ

ない。さればと言つて女の父母、親戚の側からの誘惑に崩れて行くやうな二人の間柄ではなかつた筈だ。かれは残念ながらも自己の貧と女の虚榮心とはその原因を歸するより他に仕方がなかつた。

『僕等の熱烈なる戀が虚榮心の犠牲になつたかと思ふと實に情ない！』かれは幾度となくから友達に向つて言つた。

『いつぞ死んで呉れ、ば好かつた』かれは自分で敷いた床の上に身を横へながら獨語のやうに言つた。

で、仰向に寐たま、暫くは天井を見詰めて居た。

四

『死んで呉れ、ば好かつた』

死んで呉れたのなら、二人の間に取交された感情、言葉、秘密、それが皆な藝術品のやうになつて、其處から楽しい悲しい記憶の泉を無限に汲み出すことが出来るのであるが、假令いかに離れた、いかに遠い没交渉な土地に二人が住んでゐても、一度其の體を合せた男と女との何方かが依然として生存して居る以上は、一方の相手は不安な不愉快な念に驅られない譯には行かなかつた。かの女はかれの吸つて居る空気を矢張同じく吸つてゐて、かれに與へた媚と肉體とを矢張同じく他の男に與へることが出来るではないか。

『死んで呉れた方が何んなに好いか知れやしない。死んで呉れ、ば、僕はいかやうにも女を美化して、そのイリュウジョンの中に楽しく住んでゐることが出来るけれど、別れたのでは、さういふ譯には行かない。楽しかつ

た事實の思ひ出でさへ、暗い不愉快な醜い影を帯びて来るのだからね」

かれはから親しい友達の一人に言った。

二人が同じ空気を吸ひ、同じ太陽を見、同じ月を仰ぐに堪へないといふやうな苦しい時期が続いた。女を得なければ死！さう思ひ詰めた時期はかなり長かつた。其時には、女の胸を透つて来る空気が、そのまゝ、男の心に無線電信のやうに傳つて来るやうにすら思はれた。

女が遠い東北の親類の方に遣られたといふ噂を聞いたのは、別れてから一月ほど経つた頃であつた。女とかれとの戀の間に立つたある人からは、それを知らせた長い手紙が来た。それを見てから、かれは始めて京都に行く氣になつたのであつた。

かれは女から来た手紙を束にして持つて居た。それは十通や二十通ではなかつた。戀に落ちた二年前から段々捨て難い離れ難ない間柄に至る間の手紙が中でも殊に澤山であつた。最後の一通は、巻紙に書いてあつて、封筒には切手が六錢張つてあつた。

其の最後の手紙を見たといふ友達一人は、それに違ひないと言つたやうな調子で、その別離の原因を男が肉慾を満足させなかつたためだと言つて居た。それほど其手紙は情慾の匂ひに富んで居た。

其頃では、もう其手紙を明けて見やうと思ふやうな氣分がかれには起らなかつた。女を懐しいものに思つた心は、いつとなく憎悪の念に變つて居た。かれは手紙から来る刺戟を恐れて、それを深く抽斗の底にかくして置つた。

憎む心と愛する心、それがかういふ風に複雑してかれの心に迫つて来やうとは思はなかつた。郊外に来てから間もなく、かれは友人達と其女の話をすることを避けた。

『もう、そのことは言はないで呉れ給へ』

其の話が出ると、かれはかう言つて顔を盛めた。

かれは自から問うた。

『では、もし、かの女が今日にも此處に遣つて来て、重々その不心得を詫びるやうなことがあつたら何うだ。それでもお前は許さないか』

『許さな』

かう答へたが、かれはすぐ考へ續けた。『そんな考を起すから駄目だ。汝はもう疾うに女から忘れられてゐるのを知らないのか。詫びに来るところ

か、汝を恐れて身をかくしてゐるのぢやないか。馬鹿な奴だ』かう思つたかれは、その言葉の烈しいのに似合はず熱い涙の頬を傳つて流れ落ちるのを感じた。

憎まなければならなくなつた此身が悲しかつた。さうした處に連れて行かなければ何うすることも出来ない自分が情けないやうにも思はれた。

『奥さんの寫真何うなすつて？』

ある日、大工の上さんは柱の寫真挟に知らない風景の寫真が挟んであるのを見てから尋ねた。

『もう藏つちやつたよ』

『何うして？』

『目障りでいけないから』

『あんなことを言つてる！』

『でも本當に思ひ出していかんからね。それに、出て行つた女などもう何うでも好いからねえ』

『それはさうでせうね。』

かう言つて上さんは笑つた。

何うかすると、かれはこの上さんと二人切りで一日を過ごすことなどがあつた。京都から歸つて來た當座は、それでも友達がたづねて來たが、段々それも少くなつて行つた。夕暮など何うかすると、飯を炊きながら、上さんは自分が廊に居た時のことなどを話して聞かせた。今の亭主に惚れ合つて、無理な思やり、不義理な真似やらして、漸く思ひが届いたと思へば、男といふものは薄情で、今ではもう女を何處かに拵へてゐるなどと言つた。

『でも、仲が好ささうぢやないか』

『こつちが惚れてゐるから、喧嘩もしないがね。それや腹が立つことはありませうよ』

『餘り好い心持はすまいね、女を拵へてゐることが解つちや——』

上さんは、薪をくべながら、『こつちを構はないやうにすれば、それは黙つて承知してゐやしないけれど、こつちを好くして置けば、女を拵へるのは男の器量だからねえ』

『さういふもんかねえ』

こんな話をしながら、かれは夕暮から降出した雨を見詰めてゐた。窓の烟は青く薄暮の空に靡いて行つた。

何うかすると、下の家で三味線の音がすることがある。何か陰つてゐる

やうな氣勢もする。あの長火鉢の上にかけてある三味線だな！といつてもか
れは思ふが、ついぞ今まで行つて見たこともなかつた。

それは薄月のある静かな夜であつた。ふと、かれは覗いて、嚇かしてや
らうと思つて、こつそり窓の下に歩み寄つた。窓の破れから覗いて見ると
磯さんは節つけのしてある本を膝の上に置いて、顔を膨らませて、頻りに
義太夫を唸つてゐる。其傍の長火鉢の前には、上さんが三味線を弾きな
がら、熱心にその拍子を取つてやつて居る。

三分の釣洋燈が薄暗く一間を照してゐた。

かれは聲を懸けて嚇かしてやらうと思つた最初の計畫を忘れて、其儘ぢ
つと其處に立盡して了つた。一間しかないこんなおはれな小屋の中にも、
かうした楽しい團樂があるかと思ふと、かれは堪らな一種の哀愁を覚え

ずには居られなかつた。窓の下に印せられた黒いかれの影は、暫くの間其
處を離れやらうともしなかつた。

『昨夜、窓の處に行つて、立つて聞いてゐたけれど、餘り睦しさうだつた
から、邪魔だと思つて歸つて来て了つた』

翌朝、竈の焼落を十納に入れて枕元の火鉢に持つて来た上さんをつかま
へてかれは言つた

『虚言だらう？』

『うそなことがあるもんか。壺坂をやつてゐたぢやないか。磯さんの顔を
見てゐると、それは可笑かつたぜ』

『でも、上手なんだよ、あれで』

『お上さんが仕込んだんだからな』

「いゝえ、私なぞより本物だ。あれで」

『それに惚れ込んだって言ふ譯だね』

上さんは笑つて、

『道理で、何だか人の足音がしたやうな気がしたよ……つひと曲りね、霞
郎は。そんな氣遣をしないで、入つて来れば好いのに』

『邪魔をするより、むつまじい處を傍から見ている方が好かつたからね』

『あんなことを言つてるよ』

かう言つて、十納を持つて、上さんは勝手へ下りて行つた。

昨夜、それから暫く家の周囲を歩いて居たが、薄月のぼつとした景色に
そゝのかされて、つい町の方まで遠く歩いて行つた。かれは巻煙草を吸ひ
ながら、そんなことを繰返して頭に浮べて居た。

野は段々深い秋の色を帯びて来た。

家の前の斜坡の處々に植ゑられてゐる楓や柞も一雨毎に紅くなつて行つ
た。何うかすると、凄じい風が廣い野を通つて、其餘勢を高い樹木の梢に
見せて居た。

時には、友達が遊びに来て、『好いねえ、實に好いね、郊外の秋をこんな
に好く味ひ得るところは少い』などと言つて、縁側にちつと立盡してゐる
人達もあつた。暖かい日當に座蒲團や藤椅子を持出して、柱に凭りかゝつた
り何かして、二三人で頻りに人生問題を論じ合つたりすることもあつた。
机に向つて仕事をしてゐるかれは、硝子障子を隔て、日本畫でなくては
見られないやうな庭の紅葉を眺め暮した。

雨の降る日には向うの牧牛場で鳴く牛の聲が際立つて高く聞えた。
かれは此頃よく町の方に散歩に出かけた。矢張竹の根のステッキを抱へて居た。

町に出やうとする處に水車場があつた。車の廻る響につれて、水の落ちる音が凄しく聞えた。餘流の落ちて碎けるさまは、月の夜などには殊に見事にかゞやきわたつて見えた。門の前にはいつも荷車や荷馬車が置いてあつて、時には白い粉の一杯に體についた男が、吠や俵を運んでゐるのを見かけることなどもあつた。ちつと立盡したかれの姿はよく其處に見えた。

町は郊外によく見るやうな種類の町であつた。古びた旅籠屋、くさい臭氣の鼻を撲つ鹽物屋、幾日も同じ腿の肉を下げてゐる牛肉店、さうした家が兩側に古く傾いた軒を並べて居た。汚いチャンチャンを着た子供が遊ん

で居たり、荷馬車がガタガタ通つて行つたりした。近所にある工場の汽笛がこの郊外の町にをり／＼正確な時刻を知らせた。

町はいくらか爪先上りになつて居た。中ほどに小さい川があつて、それには古ぼけた板橋がかつてゐた。橋の下流には、樺や楓や檜などの大きな樹が蔽ひかぶさるやうに茂つて、いつも暗い影を水の上に落してゐた。

其處に、川に臨んで、一軒西洋料理店があつた。

それをかれはその町に初めて散歩に来た時から知つてゐた。Restaurantと白壁に大きく書いてある字の四邊に釣合ないのが、一番先にかれの注意を惹いた。それから硝子戸のはまつた二階が眼についた。天氣の好い日には、明放つた窓から、白い布のかつた卓に、コップや、水の入つた罎や、赤い白い花などの置いてあるのが見えた。何うかすると、川に臨んで白い

服のボーイや赤い襷をかけた若い娘などが皿か何かを洗つてゐるのを見たこともあつた。

其日は曇つてゐた。今にも雨が降つて来さうであつた。かれは家の中にどつとして居るのに堪へられないほどむしやくしやしてゐた。で、かれは出かけて来た。

いつものやうに水車場の前で立留つて、それから町に入つて、雑誌屋の前を行き過ぎて、また戻つて、昨日發刊された雑誌を鳥渡手に取つて見たが、急に、『おいこれ呉れ！』と叫んで、懐の財布から二十錢銀貨を出した。で、歩きながら五六頁其雑誌を翻して見たが、すぐ懐にねぢ込んで了つてまた前のやうな静かな歩調で歩き出した。

鳥屋の前では、インコだの鸚鵡だの金糸鳥だの、歌つたり飛んだりする

のを、長い間ちつと見てゐた。

橋の上では、われを忘れたやうにして暫く立盡してゐた。

後には欄干に凭りかゝつて下を覗くやうにしてゐた。

それも道理であつた。其處には、かれを惹きつけるある小さな光景が展けられてあつた。川につき出した洗場には、赤い襷をかけた桃割に結つた十七八の娘が、幾枚も重ねた白い皿を、腕を伸して熱心に洗つてゐた。上には真紅に染つた紅葉が水を彩つてゐた。

かれは紅葉を一枚摘み取つて、それを欄干の上から流して遣つた。

紅葉は娘の白い腕の傍を流れて行つた。娘は知らずにせつせと皿を洗つてゐた。かれは一枚、二枚、三枚まで同じやうにして流してやつた。

それが——同じやうな真紅な紅葉が三枚まで流れて来たといふことが、

娘の小さい心を誘つたらしかつた。娘はやがて顔を舉げて上を見た。莞爾笑つたかれの顔を見て、娘はさつと顔を赤くした。

こんなことに忘れ難い興味を感じるほど、かれの心はセンチメンタルになつてゐた。かれは娘が皿を洗つて、恥かしさうに家の裏口に入つて行くまでちつと其處に立つて見てゐた。

坂を登つたところで、町は盡きてゐた。其處からは、半ば林、半ば高臺になつてゐた。をりをり秋の午後の空に見るやうな霧が何處からともなく俄かに押寄せて來た。それは深い深い霧であつた。かれはその霧の中に立つて、四邊を見て居た。

何とも名状することの出来ないやうなさびしさがかれの心を強い力で襲つて來た。其處に立つて居るかれ！ 鼠色の霧の天地の中にぼつねんと立

つてゐるかれ！ かれは全く一人である。かれを思つて呉れるものはこの廣い世の中に一人も居ないのである。あの不貞な女は、今時分はもう他の若い男の腕に抱かれてゐるかも知れないのである！ 廣い砂漠の中に唯一人この自分は居るのである——かれは雨が降つて來るのも知らずにかう思つて其處に立盡してゐた。

其後かれはその娘と知るやうになつた。

娘は名をおけると呼ばれた。年は十七である。その西洋料理店が遠い親類に當つてゐて、手傳ひに昨年から來てゐるといふ話である。

無論かれが出懸けて行つて逢つたり聞いたりしたのだ。

それは外から見たほど綺麗な二階ではなかつた。テーブルクロスも餘

り新しいとは言へなかつた。

其家には、娘の他に男のボーイが一人ゐるばかりであつた。好い鹽梅に其日は娘が獻立の板をかれの前に持つて來た。

娘は無論先の日の橋の上のいたづらを知つてゐた。恥しさをさうにしてゐた。

『お酒は？』

注文を聞いた後に、娘は小聲で訊ねた。

『キリンを一本』

『大の方？』

『え』

かれは笑つて見せた。

橋の上から見たほど綺麗な娘でもなかつた。しかし肌の理の細かいのと眼の光のあるのと丸顔で愛嬌のあるのが何處となくあたり際立つて見えた。恥しさをさうにしてはゐるが、かういふ處に居る娘だけに、客に話をするのを億劫にしてはゐなかつた。

『私、さまりがわるかつたわ』

此の間の橋の上の話がかれがすると、娘はかう言つて笑つた。

『だって、同じやうな眞赤な葉が流れて來るんですもの。私、あの時、不思議に思つたのよ。ふつと見上げると、貴郎がゐるんですもの、變な氣がしましたわ』存外打解けた口の利き方をした。

かれは麵のフライ一皿とロールキャベージ一皿とそれにパンを焼いて貰つて食つた。其日は晴れた日であつた。一本のビールに酔つたかれの顔は

夕日に明るくかゞやいて見えた。

娘は調子の好い客の言葉にすぐ引張られたといふやうに、心安くいろいろなことを話してさかされた。客の座を占めてゐる傍の椅子に凭れるやうにして、娘は客と長く相對して居た。その名から年齢まで話した。それからかれはよく其處に出懸けて行つた。

『今夜は支度をしなくつても好いよ』

かうかれは度々大工の上さんに言つた。

上さんも後にはそれを不思議にした。『何處に行らつしやるのよ』などと訊いた。

それと知つた時『まだ子供ぢやありませんか、おんなもの。加藤さんも餘程何うかしてるのね』

上さんがかう言ふと、

『すぐ、君だちはさういふ風に勘ぐるからいけない』言ひかけて笑つて、

『何もさういふ積で行くんぢやないよ』

『若いのが好いんだね、矢張』

上さんはその辯解を聞かうともしなかつた。

『あれは、あれでもあそここの家の看板なんですって、農科の學生がよくあそこに出かけて行くのも、矢張あの娘が居るからだといふことですよ』あの時、上さんは、何處からかそんなことを聞いて來てかれに話した。

時にはかれは友達を其處に伴れて行くことなどもなつた。その時は、かれはさまつてその紅葉を流した話をしながら歩いた。『世の中にはロマンスチックなことがあるものだね、君。これで僕がラブにでも落ちれば、それこ

と申分がないんだけれど』かう言つて、『それからまだ君に見て貰ふことがあるんだ。それは向うに行つてからでなくつては解らん』
 それは他でもなかつた。其處に伴れて行かれたかれの友達は、眼と顔の輪廓との著しくかれの前の戀人に似た若い娘の顔を見た。
 『世の中にはローマンスが多いね』
 かれはフオクを動かしながら、かう友達に向つて言つた。

五

ある日、其の幽棲に不意に訪ねて来た女があつた。
 大工の上さんは、束髪に結つた縮緬の羽織を着た二十三四の華奢な女が門から此方に入つて来るのを見た。あの寫眞の女が来たのか知らんと始め

は思つたが、何うもそれとは違つて居るやうに上さんには思はれた。寫眞挾の女はもう少し綺麗な人だつた。

『秀夫さん！』

縁側に出て本を見て居たかれは、さう呼ばれて驚いたやうにして其方を見た。

かれはイキナリ縁側にある下駄を突かけて、急いで女の遣つて来る路の方へと出て行つた。窓の處から顔を出して居た上さんは、其處で二人が黙つて立留つて握手してゐるのを見た。

男の顔には赤く血が上つてゐた。

女も激して居た。

『まあよく来て呉れましたね』

男がかう言ふと

『でも、まア、漸く知れて好かつたこと。それに、もしか留守だつたら何うしやうと思つて、そればかり心配して來ましたのよ』男の顔を見て、『貴郎、瘦せましたね』

『苦勞しましたからね』

『どうね』

女は縁側に腰をかけて、『私はお光さんが家出をしたといふ噂を聞いた時から、何んなに心配して居たか知れないんですよ。それにしても何うしてまア、お光さんがそんなことをしたでせう、私には長い間本當に出來ませんでしたよ』もう一度男の顔を見て、『でも御目にかゝれて嬉しかった。今日お目にかゝれないと、いつまた逢はれるか解らないんですよからねえ』

『何時です？ 亞米利加にお立になるのは？』

『この十七日の船で發つつもりですがね。秀夫さん、それは忙しいのよ。』

『しかしまア、お上んなさう』

かう言つて女を座敷に請じて、

『男やもめで、何もお構ひは出來ませんけれど、お茶位は上げられますか
ら』

かれは縁側に出て、聲をあげて大工の上さんと呼んだ。

上さんがのこゝやつて來て、七輪に火を起して呉れる間、二人はポツポツと途切れ勝ちな會話をつづけた。物語よりも互に昔のことが思ひ出さるゝといふ風に見えた。

お貞さん！ 増田お貞さん！ 何んなにやさしい温順な女だつたらう。

お光とかれと烈しい戀に陥ちた最初から、彼女は二人の間を詳しく知つて居た。かの女は二人の戀の初めから終までを知つてゐた。そして二人が結婚する間もなく、良縁を求めて、宣教師に嫁ぐことになつた。温順なかの女は、死ぬやうな辛い悲しい運命に服従して其人の許にといふ其頃の噂であつた。

天

『何うして、一體、そんなことになつたんでせうかね？』

『お互に解らなかつたんですね』

『でもねえ、あんな熱烈な戀が一年も経たない中にそんなことになつて了ふものでせうか。私には何うしてもお光さんの心が解らない！』

『あなたなどとは丸で違ふ女なんですから。虚榮心の多い、エゴイステックな……』

『たよりも何も無いんですか？』

『え、え、』

『世の中にそんなことがあり得ることとせうか。あんなに熱烈な、まことの戀が、そんな風にしてさめて行くものでせうか。それが本當なら、私など、何だか世の中が恐ろしいやうな氣がしますわ』女はかうして獨り住んで居るかれを痛むやうな眼色をして見た。

お光に別れてからのかれの生活を女はかなりよく知つて居た。お光とかれと其女と、その三つの心がある時は巴のやうになつて生きて動いたこともあつた。ある温泉場の旅館屋の間では、三人は床を並べて寝たこともある。其時、終夜眠られずに長大息をついてゐたのは、二人の戀人ではなくてこの女であつた。若い二人の戀を監督するやうな地位に身を置きなが

天

ら、其の男に人知らず戀してゐたかの女の心は譬へやうもないやうなものであつた。

大工の上さんの眼にも、二人の間の關係といふやうなものが映つた。女にも男にも昂奮したやうな調子が何處かにある。中でも、女にはそれが著しかつた。熱い赤い頬に幾度となく手を當てたりなどしてゐた。

『然し、もう大丈夫です。夢に見ることも少くなりました』
かれは笑ひながらこんなことを言つた。

『もとのやうにはならないものでせうか。お光さんだつて、可哀相ぢやありませんか。悔い改める日を待つて上げて下さい。……女は麻弱いものです』女は犠牲の精神に富んだ昔の感情を男に思はせるやうな口の利き方をした。

『しかしこれまでにするには、随分大きな苦痛と戦つたんです。男の苦みは女には解らないんですからね』
『それはさうでせうね。……私にはよく解りますわ』
女は考深き目付をした。

『ぢや、お別れね』
女の眼からは涙が滴れた。『丈夫でいらつしやい。三年経つと、私も歸つて來ますから』
『三年——その頃は僕は何んな生活をしてゐるでせうね。丸で違つた生活に入つてゐるかも知れませんよ』
二人は堅く手を握りかはした。